
CATCH THE RAINBOW

たちばなりん子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A T C H T H E R A I N B O W

【Nコード】

N 6 9 0 7 U

【作者名】

たちばなりん子

【あらすじ】

異世界トリップ。王様×高校生。
家族そろって田舎に帰省した大月真白（おつきましろ）（15歳）は、突然別世界に迷い込んでしまった。そこは深い森の奥、まったく見知らぬ場所である。真白を助けてくれたのは、ファンタジーの世界で見るとな旅行者の恰好をした美形の男。いきなり剣？ 兵士？ お城！ このかっこいい狼、ロボって名付けていいですか？ ゆっくりまったり進んでいくお話と、ラブ？ストーリー（予定）です。
別サイト掲載&同人誌にて発行したお話の再掲載です。

PCサイト
http://www.h7.dion.ne.jp/

第1話

夜空を見上げれば、満天の星空が広がっていた。

星座に詳しくはないけど、こんなにも美しい星空が見られるなら、もっと知っておけばよかったと、少し後悔する。

オレが住んでいるのは都心で、こんな綺麗な夜空は見ることできないから、今まで興味を抱くこともなかったのだ。

「あれ、何座っていうんだろう。北極星とか、そんなのだったら分かる…かな？」

確か北の空で、一年中、一晩中動かない星だったはず。

オレは一生懸命、夜空に北極星を探す。

「ない…っていうか、どれが北極星か分からない。…どうしよう」
何だか泣きそうな気分だ。

「タロウ、ジロウ…どこ行っただよ」

オレは途方に暮れた声が出た。

どこを見渡しても、木、木、木。

うつそうと生い茂った森がどこまでも続いていくばかり。

その隙間から覗く満点の星空も、すごく綺麗だけど、何の慰めにもならなかった。

一緒に森に入った愛犬のタロウとジロウも、どこに行ったのかまったく分からない。

北極星の位置でも分かれば、せめて方角くらい分かるかと思っただけど、肝心の北極星が見分けられなかったら意味がない。

夏休みに入って、初めて母方の祖母の元に遊びに来たっていうのに、裏山で迷子なんてシャレにならない。

…このまま遭難したら、すぐく問抜けだ。

オレはポケットに入れた携帯を取り出してみた。

「…圏外。そりゃそうか。祖父さん祖母さん家も圏外だったもんな。その奥にある裏山に電波が届くわけないって」

分かっていながら、携帯を取り出すのはもう何回目だろう。電波を探して、携帯をあちらこちらにかざしてみたりする。

もしかすると、ちょっとでもアンテナが立つかもしれない、と期待してしまうのだ。

でも、オレの願いも虚しく、表示はずっと圏外のままだ。

「くそ。それもこれも全部あの従兄弟のタカシとかって奴のせいじやんか」

オレは木々が少し開けた場所に出ると、ちょうどいい高さにあった岩に腰掛けて毒づいた。

ぐるりと周囲を見回しても、まったく何の明かりも見えない。

どこかにあるはずの、祖父母の家の明かりも、街灯の明かりすら…。

どこまでもうつそうと広がる暗い夜の森。星明りがわずかに足元を浮かび上がらせているけれど、月の姿は見えない。

「…オレ、迷子になっちゃったよ」

ポツリとつぶやいたオレは、途方に暮れてしまって、もうどうすればいいのか分からなかった。

第2話

高校に入って最初の夏休みを目前にした、家族がそろった朝食の席だった。

「今年の夏休みは、みんな揃って田舎に帰るから、全員休みを合わせるように」

突然、父さんが宣言するように言った。

「なに、オヤジ。去年まではんなこと言わなかったじゃん。第一、たいていオヤジとお袋と真白の3人で行ってんのに、なんで今回は俺らもなわけ？」

トーストをかじりながら、すぐ上の兄の萌葱が嫌そうな声を出した。

モエ兄は、アパレル関係の仕事をしているだけあって、見た目すごくイケてる。

今年で二十九歳だけど、もつとずっと若く見えるし、茶髪もロン毛も、すごく似合っているのだ。：父さんや兄さんたちには不評だけど。

「今回は母さんの実家に行くことになったんだ」

「えー！」

オレだけじゃなく、みんな驚いた声を上げた。

「じゃあ、やっと許してもらえたの？」

瑠璃姉さんがびっくりしたように顔を上げた。

その言葉に母さんが嬉しそうに頷く。

母さんは十八歳の時、父さんと知り合って恋に落ち、家族の反対にあって駆け落ちしたのだ。

確かに父さんと母さんは年が二十歳も離れているし、その上父さんはバツイチで、子供も四人いた。

それでも熱烈な恋に落ちた二人は、離れることはできないと、母さんが成人するのを待って強引に入籍したのである。

母さんは家を出て、その身ひとつで父さんの元に嫁いだのだ。

パパと結婚できたから、ママはすごく幸せよというのが、母さんの口癖だった。

小さい頃から、何度も聞かされた両親の恋物語である。

その後、二人の間にはオレという子供も産まれて、先妻の子である兄や姉とも仲良くなり、どこにでもあるような平凡で、でも幸せな日々を送っていた。

だけど、母さんの実家とは没交渉で、オレは今まで一度も母方の親戚の話を聞いたことすらなかったのだ。

「お母さんが、…真白、あなたのお祖母さんが、あなたに会いたいです。夏休みに連れてきなさいって、言ってくれたの」

母さんはすごく嬉しそうな表情で言った。

「だから、家族全員でおじやますることにしたんだよ。わたしたちがどれだけ幸せか、充分に見せ付けてやろうと思ってるね」

父さんが母さんの肩を抱き寄せながら言う。

そうすると、母さんはいつそう嬉しそうな表情になって、自分から父さんにもたれかかるようになってくっついた。

二人はうつとりと見詰め合って、微笑みあっている。

オレは相変わらずの両親の様子に呆れながらも、仲の良い二人が自慢でもあった。

兄さんも姉さんも、オレが生まれた頃にはみんなもう反発を感じるような年齢ではなくで、異母弟のオレをとても可愛がってくれた。正直、オレは自分が甘やかされまくった末っ子だっという自覚がある。

遅くにできた、最愛の妻の子供であるオレのことを、父さんは溺愛してくれたし、愛する人の子供であるオレを母さんもすごく大切にしてくれる。

兄弟というよりは親子のように見えてしまう兄たちや姉。

とにかくもう、本当に仲の良い家族だったのだ。

そんな中で、母さんの唯一の心残りか、実家を飛び出してきたこ

とだった。

聞いた話では、その母さんの実家というのは京都の山奥にある、ずいぶんと辺鄙な場所とのことである。

昔は山の奥の小さな村だった場所で、母さんの父さんはその村の村長だったらしい。村は小さいといっても、その周辺いつたいの山はすべて村長のもので、かなりの地主でもあったそうだ。

さらに、市議会議員としても有名で、地元ではかなりの権力者でもあるらしかった。

そんな中で、母さんは三人兄弟の末っ子として生まれたそうだ。

兄が二人いて、ひとり娘の母さんはすごく大切に育てられたらしい。だから余計、取材旅行に来た二十歳も年上の、作家なんかしている父さんと駆け落ちしたことが許せなかったのかもしれない。

「：そういうことなら、仕方ないわね」

瑠璃姉さんが鹿爪らしい表情で言った。

キャリアウーマンの瑠璃姉さんは、いつでもびっくりするくらい忙しい。もうすぐ三十路だっというのに、恋人の影などまったくなくて、いつでも仕事だと世界中を飛びまわっているのだ。

だから、毎年夏休みはお盆時ではなくて、いつもずらして取っている。それを今から調整するのは、きつとかなり難しいことなのだと、その表情が物語っていた。

「ボクはいつでも大丈夫ですよ」

長兄の蘇芳兄さんが静かに言う。

蘇芳にいさんはいつでも穏やかで、冷静で、声を荒げたところなんか見たこともない。

小さい頃からオレが悪戯をすると、叱るのは父さんじゃなくて蘇芳に兄さんで、淡々と、静かな口調でオレのしてしまった悪いところを諭すのだ。正直、大きな声で叱られるよりもずっと身に染みた。「俺も大丈夫だよ。元々うちはお盆が休みだしね」

次男の琥珀兄さんも同意する。

「まあ、俺もどうにかするかなあ」

モ工兄も賛成して、お盆休みは家族全員で母さんの実家に行くことになった。

「真白、よかったね」

嬉しそうに笑う母さんに、オレも同じように嬉しくなった。

父さんの両親は亡くなってるから、オレにとっても初めての祖父母だ。

祖父ちゃん祖母ちゃんっていうのは、どんなだろう？

それに、母さんには兄が二人いるって言ってたから、伯父さんにも、もしかすると従兄弟にも会えるかもしれない。

オレはまだ見ぬ親戚に、かなり心が沸き立つような気持ちになった。

まさか、その先で思いもかけない出来事が待っているとは思ってもいなかったのである。

第3話

「母さん、まだ先？」

家を出てからかれこれ十二時間。

朝は四時に起きて、五時に出発。六時の新幹線に乗って、京都についてからも電車で二時間、バスに二時間。さらに単線の電車にのりかえて、その後はまたバス。

いったいどれだけの田舎なんだ、と言いたくなる。

「このバス、一日に一本しかないんだよね。こんな土田舎だなんてオレは正直、ここまですごい場所だとは思わなかった。

母さんも確かに、田舎だからと繰り返し返していたけど、想像よりもずっとずつと何も無いところだったのだ。

「真白、間違ってるよ。このバスは、週に一回、一日に一本しかないんだ。だから、今日の運行が終われば次は一週間後。俺たちが帰る日にしかないんだな」

「うえ〜」

琥珀兄さんの淡々とした言葉に、オレはうんざりとした声が出た。母さんの実家に行くのはいいけど、ここまでの僻地だと、移動時間だけでぐったり、うんざりだ。

「母さん。ホントにこんなトコに人住んでんの？」

バスの最後部席に父さんと並んで座ってる母さんに声をかけると、当然でしょ、と返された。

「仕事を持っているお父さん…、あなたのお爺さんや伯父さんは、普段は街にある方の家に住んでるから、ここはひいお爺さんやお祖母さんたちが住んでるのよ。でも、お盆だからみんな帰省してるし、子供たちもいるだろうから、きつと今は大所帯ね」

そりゃそうだよな、と納得する。

どう考えても、ここに住みながら仕事に通うなんて不可能だ。

たとえ自家用車があったとしても、街までは遠すぎる。

オレはあまりにも長い道行にため息をついた。
もう、正直疲れ果ててしまった。

すると、そんなオレに同意するように、足元で小さな鳴き声がする。

「タロウ」

オレは足元に置かれたキャリーケースを持ち上げた。

そこには愛犬、タロウがいる。

犬種はパピヨン。今年で三歳のオスだ。

すると隣に置いたもうひとつのケースからも鳴き声がある。

「ジロウも。…疲れたよな？」

同じように持ち上げて、座席の横に置いた。

こちらはミニチュアダックスフンド。同じく三歳のオス。

どちらも可愛いうちの家族の一員だ。

オレが中学に入って初めての誕生日のプレゼントに二匹はうちにやってきた。

パピヨンのタロウは父さんから、ミニチュアダックスのジロウは蘇芳兄さんから。

オレが小学生の頃、ずっと犬を飼いたいと言っていたから、中学生になったからと、二人ともプレゼントに犬を用意していたのだ。

お互い何をプレゼントするのか相談をしていなかったため、結果的には二匹の犬が我が家に来たのである。

ちなみに、命名は父さんだ。元ネタは昔の動物モノの映画らしいけど、オレはその映画は見たことがなかった。

「まったく。こんなに時間かかるんだったら、ペットホテルに預けてきた方がよかったんじゃないの？」

モエ兄が疲れ果てたように言う。

確かに、キャリーケースの中の二匹は、かなりぐったりとしていて、疲れているようだ。

無理もない。今までこの子達がきてから、家族全員で旅行に行くことはなかった。だから、こんなふうにキャリーケースに入れて長

時間移動させるのは初めてなのだ。

「やっぱり車で来たほうがよかったかしらね」

瑠璃姉さんも、疲れたように言う。

「そうだよなあ。車三台くらいに分かれてくれば、タロジロもケースに入れなくてよかったし、同じくらい時間がかかって、もうちよつと気分的にラクだったんじゃないの？」

モエ兄も同意するように言った。

今さら言っても仕方ないけど、それはオレも思った。

でも、本当に、イマサラ、だ。

「でも、帰ったら翌日出勤だし、運転したら疲れるかもしれないって言ったの、モエ兄じゃん」

オレが言うと、モエ兄は、嫌そうに顔をしかめた。

「真白、そう言うけどなあ」

「それにモエ兄の車、ツーシーターじゃん。ベンツのオープンカー。趣味悪いよね」

「…真白」

モエ兄は恨めしそうにオレを見たけど、軽く無視する。

「萌葱の負けだな」

可笑しそうに琥珀兄さんが笑って、母さんも父さんも笑う。

そうしているうちに、バスの運転手が目的地に到着したことを告げた。

オレ達しか乗ってなくて貸しきり状態だったバスを、大荷物を持って降りる。

「…何にもない」

錆びてボロボロになったバス停のポール。

舗装もされていない道。

そしてその道の両側にはうつそうとした木々。

「母さん、ホントにここであってるの？」

見渡しても民家は一つも見えない。

それどころか、深い山並みが見えるだけだった。

生まれてからずっと、街中で暮らしてきたオレにとって、ちょっとしたカルチャーショックといってもいいだろう。

遠足で出かけた飯盒炊飯でも、もっと開けた場所だった。

「あってるわよ。こっちよ。ちよっと上り坂だけどね」

母さんは荷物を持って、道を登り出した。

慌ててみんなも着いて行く。

「ね、母さん。もしかしてこの坂道、ずっと登るわけ？」

はるか遠く先に見える坂の上まで、道は長く続いている。

「この坂を登ったところが目的地よ。ほら。頑張って登りましょう」

元気いっぱいのお母さんに先導されて、オレたちは大荷物を抱えて

坂を登った。

真夏の太陽が容赦なく降り注いでくる。

うるさいくらいの蝉の音が周り中から聞こえてきて、オレは額か

ら滴る汗を拭いた。

やっとのことで坂を登りきった時は、みんなぐったりとしていた。

「ここよ。ここが、母さんの実家」

母さんは目の前にそびえる巨大な門扉を指して言う。

「……………」

みんな、啞然として見たこともないような大きな門扉を見つめた。

うちも、父さんがそこそこ売れている作家だから、それなりに大

きな一戸建てだ。

それでも、こんな巨大な門扉には到底敵わない。

まるでそう、昔テレビで見た武家屋敷のようだ。

オレはピタリと閉じた門を見ながら、何となく嫌な予感を覚えた。

第4話

「あーあ、来なきやよかった」

オレは夜道を歩きながら、ため息と共に言った。

手に持ったリードの先には、タロウとジロウ。

ゆっくり歩くオレを先導するように、前を歩いている。

とりあえずは、あの場所から逃げ出せてよかった、と肩の力が抜けた。

母さんの実家は、期待していた「田舎」という雰囲気ではない場所だった。

いわゆる田舎の旧家ってやつだ。

屋敷は完全な日本家屋。いったいどれだけ前に建てられたのかと思うような、歴史を感じる佇まいだ。

母屋を入れて、何棟にも分かれた構造になっていて、渡り廊下で繋がっている。

オレたち一家には離れになっている一棟が用意されていて、母さんのお兄さんだという兼雅さんの車で運んでもらった荷物を、とりあえず置くことになった。

離れとはいっても部屋が三つもある、すごく広い建物だ。

それから母屋に呼ばれ、父さんと母さん、そしてオレの3人でこの家の家長。つまり、オレの祖父さんと対面することになった。

兄さんや姉さんは父さんと前の奥さんの子供だから、この家に関係ないといえば、関係ない。

でも、普通は家族全員を出迎えるものなんじゃないのか？

オレは母さんの実家っていうこの家に、かなり不信感を覚える。

だいたい、普通は長年会ってなかった娘が帰ってきたら、玄関先で出迎えるものなんじゃないだろうか？

でも、実際に出迎えてくれたのは、お手伝いさんらしき女性だった。

母さんは当然のような態度だけど、それだけでもちよつとおかしい気がする。

「…母さん」

お手伝いさんに案内されて長い廊下を歩きながら、オレはそつと前を歩く母さんに声をかけた。

「なに？」

母さんはまったく疑問にも思っていない様子で振り向いた。

「……」

そんな様子を見てみると、オレが感じてる疑問の方がおかしいのかとすら思えてしまう。

「真白、気持ちは分かるよ」

苦笑しながら言ったのは、父さんだった。

「父さん…」

オレは父さんの表情に、自分の感覚が間違いではなかったことを知る。

「わたしが、母さんとのことをただ連れて逃げるような男だと思うか？」

父さんはオレの横に並んで歩きながら、苦笑を浮かべて言った。

その言葉に、まさか、と否定に首を振る。

父さんは文筆業をしているせいとか、とても冷静で温和な性格だ。

小さい頃から、声を荒げて怒鳴ったり、暴力に訴えたりと、そんなところは一度も見ることがない。

体型も、どちらかといえば細身で、いかにも文芸青年がそのまま年を取ったような容姿だった。

確かに、そんな父さんと「駆け落ち」や、「強奪」という言葉は結びつかない。

「わたしも、何度も母さんとの結婚を承諾して欲しくて、お義父さんに訴えたんだけどね、…何と言うか、古きかな日本の父親とでもいうのか、封建的だというのか、聞く耳を持っていなくてね。その上、家族制度が根強く残った地方のせいとか、家長の言葉は絶対だ、

というような雰囲気なんだよ。だから、誰も母さんをわたしの婚姻をみとめてはくれなかったんだ」

「…そんな感じ」

この家は、まるで「犬神家の一族」のようだ。

旧家で、お金持ちで、無表情なお手伝たちがいて、きっと大勢の親戚がいる。

お抱えのシエフや庭師、運転手なんかもいるに違いない。

…これだけの資産家なら、迎えの車を出す事だつてたやすかつたはずだ。

本当に、駆け落ちした娘を許して迎える気があるんだろうか？

オレはかなり重い気持ちで案内されるままに歩く。

着いた先は、日本庭園を見渡せる、すごく大きな部屋だつた。

縁側の障子が開かれていて、そこから室内の様子が見える。

「茜お嬢様をお連れしました」

案内してくれたお手伝いさんが頭を下げた。

それに、上座に座っていた厳しい表情の老人が小さく頷く。

この人が祖父さん？

そしてその横には上品な女性。

…祖母さん、かな？

オレが二人をみてそう思ったとき、母さんは畳の上に正座して、そのまま深く頭を下げた。

「お父様、お母様、ただ今戻りました」

いつもの母さんからは考えられないようなきつちりとしたお辞儀だつた。

「母さん？」

驚いてオレが声をかけるのに、父さんがだまつてるように、と小さく言う。

「この度はお許しをいただき、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

母さんに習うように、父さんまで正座して頭を下げる。

…これって、どづいづこと？

驚くオレの前、祖父さんは母さんの謝罪を受け入れるように、重々しく頷いた。

そう、頷いた。

…それだけ。

そんなことあり？

親子の会話は？

再会の喜びは？

そんなもの、いつさいなかった。

「この子が私の息子、真白です」

母さんが呆然としているオレを座らせて、祖父さんに紹介してくれただけ、それに対しても頷くだけ。

…それだけ。

こんなの、何か間違ってるんじゃないか？

オレの疑問は当然だと思つのに、そんな疑問を口にするような雰囲気ではなかった。

祖父さんはちらりとオレに一瞥を投げかけたけど、すぐに興味をなくしてしまったようだ。

祖母さんは微動だにしないで、いったい何を考えているのかも分からない。

結局、弾む話もないまま、オレは両親と二人でもと来た道に戻ることになった。

そして離れに戻つてすぐ、休む間もなく夕食の席に呼ばれて、みんな一緒に母屋のすごく広い部屋に移動した。

そこには、まるで旅館の夕食のような食事が用意されていて、オレたちはあれよと言う間に宴会の席につくことになった。

…宴会とはいつても、バカ騒ぎをする宴会ではない。

とにかく、真神家の親戚一同が揃った宴席、とでもいうのだろうか。

いちばん上に家長がいて、その家長が絶対的な権力を持った旧家

という、ドラマにでも出てきそうな雰囲気なのだ。

もちろん、上座に座ったのは祖父さんで、見知らぬ親戚がそれを取り巻いている。

オレと同じ年くらいの中にもいたけど、自己紹介が終わったあと、親しく話しかけてくる様子はない。

母さんも、普段からは考えられないくらい上品に、祖父さんや祖母さん、伯父さんらに挨拶していた。

とりあえずは、駆け落ちして黙って出奔したことを許された、ということになるんだろうか。

母さんは嬉しそうに、両親や兄弟たちと話している。

正直、居心地のいい場所ではなかった。

父さんや兄さん、姉さんたちもそうだろう。

そんな感情を露にするほど大人気ない人たちではなかったけど、それでも完全に余所行きモードの対応だった。

特に父さんは、母さんの両親に挨拶するときなんか、いつもとはまったく違った表情をしていた。

一人娘を略奪したんだから、しょうがないことなのかもしれない。とにかくにもかくにも、その居心地悪い宴席は、お酒が回ってくるにしたがって、少し碎けた調子になってきたけど、何となく、オレ達家族を観察しているような雰囲気があって、長居したい感じではなかった。

だから、オレはタロウとジロウを散歩させる、という名目で抜け出したのだ。

「…来なきやよかった」

そのセリフに戻る。

とにかく、本当に想像していた「田舎」とはまったく違う。

古い造りのわらぶきの家があって、畑があって、綺麗な川とかがあって。

頑固そうな祖父さんと、人のよさそうな祖母さんがいて、よくきかなくて迎えてくれる。裏の畑で取れた野菜なんかでもてなしてく

れて…とうオレの想像はことごとく裏切られたのだ。

「…っていうか、母さんも父さんも、こんなって知ってるなら、先に言ってくれよな」

つぶやいてみるが、最初に聞いていたら兄さんたちは絶対こなかっただろうな、と思う。

ある意味、オレ達は両親にはめられたのだ。

第5話

「あーあ…」

大きくため息をつく、タロウとジロウが慰めるようにワン、と鳴く。

「ありがと、何でもないよ」

オレは二匹に笑いかけて、ちょうど目の前にあった大きな岩に座った。

「にしても、すっげ、広いな」

今度は違った意味でため息が出る。

散歩と称して屋敷を出て、とりあえずは敷地の塀沿いに外を歩いてみようと思ったけど、いつまで歩いても塀は終わらない。

どれだけ広いんだか。

呆れるオレだったが、急にタロウとジロウが低い唸り声を上げたのでハツとした。

「なに？ どうした？」

唸る先を見ると、少し先の塀に裏木戸のような扉があって、そこから誰かが出てくるのが見えた。

どうやら向こうもこちらの存在に気付いたらしく、ゆっくり近づいてくる。

「ようっ」

タバコをくわえたまま手を上げたのは、大学生くらいの男だった。宴会の席で紹介されたような気もするけど、よく思い出せない。

「真白ちゃん、お散歩？ ……っていつか犬の散歩か」

親しげに声をかけてきて、図々しくオレの隣に腰を下ろした。

タロウとジロウは威嚇をやめない。

「あれ？ 俺のことわかんね？ 君のイトコのタカシ。K大二年、ヨロシク」

ニヤっと笑う様子はいかにも軽薄な大学生。学校名だけは有名だ

けど、とてもそんな風には見えない。

タカシはタバコの煙を吐きながら、ジッとオレの顔を覗き込んできた。

「ちょ……」

いつの間にか手が肩に回って、ニヤニヤ笑いの表情を浮かべている。

「いや、それにしても茜さんにソックリだな。マジ、女の子。性別言われんと、区別つかんよなあ」

「……！」

タカシはオレが気にしていることを直球で口にした。

確かにオレは母さんにそっくりだ。

並んで歩けば、間違いなく姉弟に間違われる。

第二次成長期がなかなかやってこないせいで、体つきもチビでガリだ。

「はなせよ！」

オレは腹が立って、乱暴にタカシの腕を振り解いた。

なんて失礼な奴だろう！

母さんに似てるってとこまでなら、許容範囲だけど、性別わからないっていうのは、いくら親戚だからって、初対面の奴に言う言葉じゃないだろう！

「あ、おい、待てよ」

岩から立ち上がって歩き出した俺に、何故かタカシは後ろをついてくる。

タロウとジロウは相変わらず威嚇してるし、オレは今日は厄日だと苦い顔になった。

「な、真白ちゃん。ちょっと待てよ。イトコなんだからさ、もっと仲良くしようぜ」

タカシはオレの横に並んで、再び肩に腕を回してきた。

「離せよ……」

振り払おうとしたけど、今度は身体ごと密着される。

「ちよつと！」

タカシは強引にオレの身体を押し、屋敷の壁と反対側にある大きな木に押し付けた。

甲高い声でタロウとジロウが吠えたが、所詮は小型犬、迫力はまったくくない。

案の定、タカシは二匹のことなど、まったく気にしていないようだった。

「うーん。やっぱりカワイわ、おまえ。アイドルなんか目じゃねえよな。な、俺とつきあわね？」

オレにすごく顔を近づけて、タカシが言う。

タバコ臭い息がかかるのに、吐き気がしそうだ。

「なに言ってるんだよ、あんた。オレ、男だけど！」

振り払おうとしているのに、体格差はいかんともしがたい。跳ね除けることさえ出来なかった。

「大丈夫、俺、可愛けりやどっちでもいけるから。おまえくらい可愛けりや、俺のオンナにしてやってもいいぜ」

「な…っ！」

気持ち悪い事を耳元にささやかれて、オレは全身に鳥肌が立つのを感じた。

オレの容姿はどうやらオンナに見えるらしく、街でナンパされることはよくあったけど、男でもいいと言われたのは初めてだ。

そんな趣味の奴がいるのは知ってたけど、まさか自分の周囲にいるとは驚きだった。

「っていつか、毎年の恒例とはいえ、このド田舎で一週間も過ごすのかと思うとうんざりしてたところだったんだよな。それが真白ちゃんみたいなお可愛い子と出会えて、俺って、ラッキー？」

「離せよ！」

自分勝手にべらべらしゃべる男に腹が立って、突き飛ばそうとしたが失敗した。

「まあ、まあ、とりあえずはお近づきのエッチでもする？ 一週間

も禁欲生活なんて、俺的にありえねえし」

「はあ!？」

意味不明のことを言って、タカシはオレの足の間に身体を割り込ませてきたかと思うと、両手で背中に腕を回してオレを肩に担ぎ上げた。

「うわあ!」

タロウとジロウがけたたましく吠える。

「うるさいよっ」

タカシが恫喝するように言った途端、キャウン、と悲鳴が聞こえた。

「タロウ!？」

不自由な体勢から何とか顔を上げると、木の幹に蹴りつけられたのか、タロウがぐったりと地面に横たわっていた。

ジロウが激しく吠え立てる。

「だからうるさいっての」

再びジロウの悲鳴が聞こえた。

「下ろせよ、離せ!」

じたばた暴れるオレを、タカシは森の奥に運んで、いきなり落とした。

「いた!」

尻から落ちて、あまりの痛みに身体が硬直する。

「夏のバカンスじゃん。一緒に楽しもうぜ」

タカシがそんなオレにのしかかってきた。

わけもわからないまま、両手を押さえつけられて、馬乗りで見下ろされる。

「俺がいいこと教えてやるからさあ。すぐに気持ちよくなるって」

ニヤリと笑う表情は、ぞっとするくらい酷薄なものだ。

オレはありえない状況に啞然とするしかない。

突然の展開に頭がついていかないのだ。

タカシの手がシャツを捲り上げて、露出した肌に触れる。

「やつ！」

ねっとりとした手のひらが身体を這うのに、オレは何とか逃れようと暴れてみたが、ちっともタカシがどく気配もない。

そうこうしている内に、ジーンズのベルトまで外されそうになった。

「やめるー！」

オレの叫び声に被るように、甲高い犬の鳴き声が出たかと思うと次の瞬間に、オレを拘束していた腕が緩む。

「いててて！ 何するんだ、クソ犬！」

どうやらタロウとジロウが噛み付いたようだ。

冷静に頭では考えたけど、オレの身体はタカシを突き飛ばすと、一刻でも早くこの場所から逃れようと、月明かりしかない暗い森を一目散に駆け出した。

雑草や枝がたくさん身体を切りつけたけど、そんなことを気にしている場合ではなかった。

そう。

パニックだったのだ。

…いやだ、怖い！

オレは感情に突き動かされるまま、とにかく走った。

道しるべも何もない、真っ暗な森の中。

立ち止まると追ってきそうな気がして、ひたすら走る。

走って、走って、走って。

そして、ふと気がつけば、右を見ても左を見ても、木々が生い茂った見知らぬ場所。

「……ここ、どこ？」

ポツリと、オレは途方に暮れたように言った。

第6話

「なんで？ そんなに走ってないよな？」

確かにパニックになってやたら暴走したけど、ひたすら真っ直ぐ走ったような気がする。

なのに今、その道に戻ってみても、屋敷の姿がまったく見えないのだ。

「タロウ？ ジロウ？」

愛犬の姿も見えない。

普通なら、彼らのほうがオレを見つけてくれるはずなのに。

「もしかして…あいつに蹴られたせい？」

怪我をして動けないんだろうか。

そう思うと、すごく心配になった。

オレは歩調を速める。

空を見上げると、満天の星。

でも、見上げたからって方向が分かるわけじゃない。

「…携帯も圏外だし、自分のいる場所もわかんないし」

携帯の時計で時間を確認すると、もう日付も変わる頃だ。きっと家族はすごく心配してるだろう。

散歩に出たきり帰らないのだから当然だ。きっと、今頃オレのことを探しに出てくれているはず。

…でも、もしこのまま誰にも見つけてもらえなかったらどうなるんだろう。

よくテレビで見たような、山岳救助隊とか、ヘリでの搜索とか、そんな大事になってきたら、そうすればいいのか。

何だか泣きたくなってきた。

まさか山で迷子になるだなんて、考えたこともない。

「だってこんな田舎、くるなんて思ってたし！」

大きな声を出してみても、返ってくるのは静寂ばかりだ。

わずかに、風で揺れる梢の音がするだけ。

「…不気味」

月明かりに照らされた森ってというのは、かなり不気味だ。遠くで何かの動物の鳴き声とか、虫の声とかが聞こえてきたりする。

「……うっ」

泣きそうだ。

人工的な明かりがないってというのは……怖い。夜がこんなに暗いものだって、今さら実感する。

「…兄さん。母さん…」

自分でも情けないと思うけど、目尻に涙が浮かんできた。

山で迷子になったときは動くんじゃないって、昔テレビで見たかもしれない。

でも、そんなのもう遅い。

すぐく動き回ってるし、自分がどっちから来たのかも分からなくなってしまった。

「どっしよっ」

どっすればいいんだろう。

…このまま、誰にも発見されないのかな。

ずっと屋敷に戻れなかったらどうなるんだろう？

野宿？

でも、テントだって寝袋だって持ってない。

第一、こんな森の中で寝て、熊でも出たらどうするんだろう。

そう思って、こんなトコに熊は生息してないはず、と自分に突っ込む。

いや、熊じゃなくても、別の動物がいるかもしれない。

「…いやだよお」

オレは立ち止まって、その先どこに行けばいいのか分からずにつずくまっただ。

だいたい、もう充分に歩いている。

方向があつていれば、屋敷が見えておかしくないのだ。

…つまり、方向が間違っているのだろう。

オレはじゃあ、逆に森の奥深くに入り込んでしまったっていうことか？

バスで通ってきた、今日の行程を思い出す。

窓から見た外の景色は、それこそどこまでも続く山。山。そして木々。

バス道も舗道されたアスファルトじゃなくて、小型の旧型バスがやっと通れるくらいの山道だ。片側はすぐに山肌で、落ちたら一巻の終わり、と言ったのはモエ兄だったか。

今オレが歩いているのは、山のような斜面ではなくて、真っ直ぐな道だ。

獣道とでもいうのだろうか、何となく踏み均したような感じがして、無意識のうちに歩いてきたのだ。

でも、それすらおかしい。

祖父母の屋敷は、山の上の方に建っていた。そこに行くまでは、バスですつと山道を登っていたのだ。

「…こんな平坦な道なんかなかった」

ここはどこなんだろう。

本当に屋敷に戻るんだろうか。

「タロウ、…ジロウ。どこ行っただよ」

途方に暮れてつぶやいた時、ふと、木々の奥で何か明かりが見えた。

「…街灯？」

月の明かりしかないこの暗い森の中で、その明かりはすごく目立っている。

オレは勢いよく立ち上がって、その光に向かって走り出した。

屋敷の外灯だろうか？

それともバス道の街灯だろうか？

しかし近づくとつれ、その明かりが揺らめいているのが認識でき

るようになった。

思わず走る速度が落ちる。

「火？」

山火事、という言葉が頭に浮かんだ。

しかし無理矢理無視して、オレはゆっくりと明かりに近づく。

だんだんとその明かりの姿が見えてくる。

それは、やっぱり火だった。

でも山火事ではなく、普通に薪をくべられた焚き火だ。

「……こんなところで？」

オレはそつと近づいて様子を見た。

そこは木立が終わりかなり開けた場所だった。

「湖だ」

丸い、それほど大きくない湖が目の前に広がっていた。対岸が見えるほどの広さである。池と湖の中間くらいだろうか。

その湖を囲むように木立があつて、湖と木立の間に焚き火は焚かれていた。

その横には小さな袋と、食器のようなもの。

誰かが焚き火の側にいた痕跡、だろうか？

でも、今こうして見る限り、人影はなかった。

オレは木立から出て、そつと焚き火に近づいてみる。

近くまで来ると、ついさっきまで人がいたような、そんな雰囲気がある。

「……でも、これ、……なに？」

オレは焚き火の近くに置かれた袋を近くで見た。

革の袋で、口のところをヒモで縛つてある。カバンというよりは、革袋という感じだ。その横にはコップ。今どき見かけないような、ブリキみたいな造りだ。

でも、問題はその横に置いてある品物だ。

「……剣？」

オレはそうとしか見えないのに、疑問形でつぶやいてしまった。

どう見ても、剣、だった。
鞘に収まった剣。

よく、ゲームで戦士が持っていたいそうな、ああいう形だ。

…これは、どういうことだろう？

百歩譲って、この辺りの猟師が持っているものだとして…。
そんなことあるはずないって。

自分で自分の考えを否定する。

どう考えても、こんな剣、普通に置いてあるわけがない。

どう考えても銃刀法違反だ。

…レプリカかな？

オレは思わず、剣を手にとってみた。

「重い…」

ずっしりとした重みがあった。両手で持っても、持ち上げるのが辛いくらいだ。

ゆっくり鞘から抜くと、そこからは鈍く光る刀身が現れる。

「真剣だ」

慌てて刀身を鞘に戻した。

心臓がドキドキと大きな音を立てる。

その上、頭も痛くなってきた。

どうみてもおかしい。

オレはすぐ横の革袋に手をのばした。袋の口を縛っている紐を解いて、中を覗き込む。

「服…？」

そこに入っていたのは服だった。

シャツに、ズボン、そして上着。

普通といえば普通なんだけど、でも、何だか違うのだ。

生地もなんだか違うし、形もあまり見たことのないようなものだ。
全体的に分厚くて、硬くて、ごわごわしてる。

「この服…、タグがない」

襟の内側に普通ならあるはずのタグがなかった。洗濯のための表

示もついてない。

いや、それ以前に、どうも手縫いのような気がする。

オレは手にした服と、すぐ横に置いてある剣を見る。

何だか、不安に押しつぶされてしまいそうだ。

この状況はどう考えてもおかしい。

オレは、ただ愛犬たちの散歩に出ただけなのに。

そのまましばらく、オレは呆然としていたと思う。思考が停止してしまって、何も考えられなかった。

第7話

なんとなく、この状況がどんなものなのか分かりかけていたけれど、そんなことがあるはずないと、理性が否定している。

どれだけ呆然としていたのだろうか、オレは近づいてくる音にハツとした。

森の中から音がしているのだ。

それはどんどんとこちらへ近づいてきて、大分たつてからやっと、オレはその音が馬の蹄の音だと気付いたのだ。

その時には、音の正体、つまり馬に乗った人間が、森の中から駆け出してきていた。

「*****ッ！」

いきなり、何だか分からない言葉で怒鳴られる。

馬はオレのすぐ目の前で止まった。

ものすごい迫力だ。

近くで見ると、馬ってかなり大きいんだ、と実感する。

「*****！」

再び、馬上の男が何事か怒鳴った。

「ッ!？」

視線を向けて驚愕する。

そこには、まるで映画に出てくるような、「兵士」がいた。

そして兵士は馬上からオレを見下ろして、抜き身の剣を突きつけてくる。

オレはもう、呆然と、バカみたいに口をぽかんと開いて、兵士を見上げるばかりだ。

「**、**！」

兵士は怖い顔で、オレに何か言ったようだが、まったく理解できない。

自分に突きつけられているのが剣だっというのも、馬上に兵士が

いるっていつもの。

ほとんど現実逃避の域に達していたオレは、目の前の兵士の後ろからもう二人、馬に乗って兵士が現れるにいたって、現実感というものが完全になくなってしまった。

…オレ、夢みてんのかな？

馬から下りてきた兵士が、馬上の兵士と同じく剣を抜きながら、オレに近づいてくる。

「***、***？」

何かを聞かれているけど、まったくわからない。

日本語ではないのだ。

じゃあ何語だって言われると、まったく分からないとしかいいようがない。英語とフランス語、中国系でないのは分かったけど、聞いた事のない言語だった。

馬を下りた兵士は、剣を抜いたままゆっくりオレに近づいてくる。

「***！ ***！」

兵士は地面に置かれたままの剣と、オレが手に持ったままの服を視線で指し示して、オレを怒鳴りつける。

何かを聞かれているとは思っけど、本当に、何もわからなかった。

「あの、日本語しゃべれませんか？」

思わず言い返すと、兵士はまた何事か怒鳴るように話しかけてくるが、まったく理解できない。

そんなオレに苛立ったように、兵士が胸倉を掴んできた。

Tシャツとパーカーが引っ張られて苦しい。

「***！」

「うっ…！」

身体を持ち上げるように胸倉を締められて、息が詰まる。

恐ろしい表情をした兵士が、オレの顔を覗き込むようにして睨みつけてくるのに、今さらながら恐ろしくなった。

締められた首が苦しい。

大柄な兵士に胸倉を掴まれ、ほとんど吊り上げられるような状態

で、理解できない言葉で攻められる。

…く、苦しい…!

息が出来なくて、目の前が霞んできた。

どうしてオレがこんな目にあわなきゃいけないんだよ。

イトコに襲われて、迷子になって、そしてまたわけの分からない連中に襲われて。

あまりの息苦しさに、もうだめだ、と思ったとき、急に胸倉を掴んでいた兵士の手が離れて、オレは尻から地面に投げ出された。

「痛ッ！」

尾てい骨を強打して、オレは腰を抑えてうずくまる。

「*****！」

「*****」

すると急に叫び声が聞こえて、オレは痛む尻を押さえながら顔を上げた。

「…ひっ！」

驚愕に喉が鳴った。

さっきオレを締め上げた兵士が、首から血を流して倒れている。

カツと瞳を見開いて、死んでいるのが一目で分かった。

「あ…ああ」

驚いて後ずさると、残りの兵士たちが剣で戦っていた。

そこにいたのは金色の、見たこともないような、大きな犬だ。

犬は振り下ろされる剣を避け、兵士の首筋に噛み付いて絶命させる。

残りの二人の兵士が物言わぬ死体となるのは、一瞬のことだった。

「あ…ああ」

オレはあまりの出来事に、腰が抜けてしまい、立ち上がって逃げ出すこともできない。

大きく嘶いた馬たちが、駆け去っていく音が聞こえる。

歯の根が合わず、ガチガチと鳴る音も耳に響いてきた。

腕も、足も、体中が恐怖に震える。

兵士二人をあつさりと沈めてしまった大きな犬が、ゆっくりとオレに近づいてくる。

その口元に、兵士のものであろう血が飛び散っていて、長い舌がペロリとその血を舐め取った。

「犬、…犬じゃなくて、もしかして、お、お、……」

声はみつともなく震えていた。

このまま殺されてしまうんだ。

オレは、こんなところで狼に殺されてしまうんだ。

このまま…。

そしてオレは、あまりの恐怖と緊張に意識を失ってしまった。

小さい頃、無性にどこかに行かなければ、という感情に突き動かされたことがあった。

あれは多分、幼稚園児くらいのころだ。

でも、それがどこか分からなくて、家を抜け出して迷子になっているところを、よく母さんが見つけて連れて帰ってくれた。

今となっては、どうしてそんなことをしたのかまったく分からなかったけど、当時は使命感にも似て強く思っていたのだ。

「真白は、神様の花嫁なのかも」

急に、当時の母さんの言葉が蘇る。

何のことか分からず問い返したオレに、母さんは丁寧に教えてくれた。

「母さんの実家は、代々大口真神を祀る神社だったの。もう何代も前に神社としての体裁を整えられなくなったようなんだけど、信仰だけは深い村だったから、今でも細々と真神信仰は続いているわ」

今から思えば幼稚園児に言ったところで、とても理解できるとは言えない内容だ。

実際、今こうして思い出すまでは、オレもそんな話を聞いたことすら、覚えていなかった。

「そしてね、昔から村には、いわゆる「神様の花嫁」伝説があったのよ。神様に選ばれた人間が花嫁になるっていう、ありがちの伝説なんだけど、でも、その伝説を裏付けるように、何故か時々忽然と姿を消す人がいたのよね。神隠しっていうのかしら。村ではずっとその人たちは「神様の花嫁」になったんだって言われてたの。それこそ何かに呼ばれるように家を出て、そのまま帰ってこないんですって」

行く先も告げず、出て行ってしまおうオレを脅かすために、母さんはその話題を口にしたのかもしれない。

ひとりで遠くにでかけると、その伝説みたいに、帰ってこれなくなるぞ、と言いたかったのだろうか。

「だから、もしかしたら真白も、そんな「神様の花嫁」になってしまいかもしれないわよ。神様に呼ばれて、神隠しにあったりしないでね」

母さんはそういつて、最後には冗談めいた口調で、おかしそうに笑ったのだった。

我が母ながら、とんでもないことを言うものである。

今になって思い出したから分かるけど、男のオレに花嫁ってというのがそもそも変な話だ。

「母さん、相変わらずボケてる」

つぶやいたオレは、自分の声でハッとして目を開けた。

第8話

「……………」

あれ？

今オレは目覚めたはずなのに、目を開けても目の前が真っ暗、という状態に違和感を覚えた。

オレは眠る時に真っ暗がイヤで、いつも蛍光灯はスモールライトを点けっぱなしだ。

だから目覚めて真っ暗、なんていうことはありえないのだ。

よく目を凝らして見ると、どうやら自分は洞窟のようなところにいるらしいと気付いた。

ゆっくり身体を起こしてみる。

その動きに、パサリと肩から布の落ちる音がした。

手で触れてみると、それは洋服のようだった。眠るオレに誰かがかけてくれたのだろうか？

オレは洋服をそのまま羽織って起き上がり、出口と思われる方向に歩き出す。

少し離れた場所に、うつすらとした明かりが漏れ出ていたので、きつと外につながっていると思ったのだ。

オレの予想は正しく、身を屈めれば通れるほどの、外に続く出口があった。

外に出ると、空が白み始めているのが分かる。

洞窟内に漏れていた光は、どうやら朝日だったようだ。

オレはゆっくりと明るくなっていく空を見て、でも、眼下に見える景色に意識を奪われる。

…ありえない。

はるか遠く、見渡す限りの緑。

どこまでも森が続いている。

「……………」

母さんの田舎のはずだった。

関西の、山奥の、集落。

バスが一週間に一本しか走ってなくて。

でも、今オレが見ているのは、見慣れた日本の景色じゃない。

いくら山の高い場所から見たって、こんな景色、見えるはずがないのだ。

目の前に広がるのは、なだらかな窪地。

山の姿なんてない。今オレがいる洞窟は、高度の高い場所にあるみたいけど、ここから見える景色の中に山の姿はなかった。

たえて言うなら、よくテレビで見るアマゾンや、熱帯雨林の奥地のような眺めだった。

どこまでも続く、緑の森。

「ここ、…どこだよ」

呆然とつぶやいたオレは、不意に背後から聞こえた草をかき分けるような音に、はっとして振り向いた。

「ヒッ！」

喉が鳴った

あまりの驚愕に、体が固まってしまったかのように、ぴくりとも動かない。

…昨夜の狼！

オレは呆然と、すぐ目前にいる狼を見つめた。

脳裏に、昨夜の光景がよみがえる。

剣を持った兵士の喉笛に噛みつき、あっという間にその命を奪ってしまった。

鋭い牙と、その口元に飛び散った血液の様子まで思い出してしまい、オレは急に、膝から力がぬけてしまう。

カクリと崩れてしゃがみこむ。そのまま尻もちをついて、立ち上がる事ができなくなった。

…腰が抜けた。

オレはゆっくりと近づいてくる狼を、瞬きも忘れて凝視する。

いや、視線を外すこともできない、といった方が正しいだろう。
一步、また一步と、ゆっくり近づいてくる狼を、オレはガタガタ
と震えながら見つめる。

止めようと思っても体の震えは止まらない。自分でどうしようも
ないほど、恐怖に反応しているのだろう。

狼の瞳がオレを見ているのが分かる。

金色の瞳だった。

見たくないのに、視線を反らしたいのには、オレの体は、瞼ですら
言うことを聞いてくれない。

ゆっくりと狼が近づいてくる。

人の体ほど大きな狼だった。

尻尾を揺らしながら、まっすぐこちらに来る。

よく見れば、毛並みも金色に近い。

美しい狼だ。

死線をそらせないオレは、ぼんやりとそんなことを思った。

まるで、誰もが脳裏に思い浮かべるような、完璧な姿の狼だ。

オレは狼がすぐ目の前まで来てやっと、瞳を閉じることができた。

このまま喉笛を噛み切られて死ぬのなら、あの鋭い牙を見ている
なんて怖すぎる。

ギョツと力を入れて瞼を閉じたとき、パタパタと音がした。

「……?」

予想したような痛みは襲ってこない。

ハッ、ハッという息使いが聞こえるから、すぐ目の前にいるのは

確実だ。

きゅん、と声が出た。

「……??」

オレはそろりと、瞳を開いてみた。

すぐ目の前に狼。

「ひっ……!」

思わず喉が鳴った。

オレはそのまま恐怖で動けなくなつたが、狼はそんなオレを黙つたまま、じつと見ている。

小さく首をかしげて、きゅん、と甘えるように鳴いた。

「……………」

オレは恐る恐る狼を見る。

お座りの体制で、パタパタと尻尾を振って、金色の瞳でじつとオレを見ていた。

とてもオレを襲うような雰囲気ではない。

「……………」

ぼかんとして、まるでオレの愛犬達のような狼を見た。

オレの愛犬である太郎も次郎も、いつもこうしてオレの前で、尻尾を振りながら甘えるようにオレを見上げてきたものだ。

「おまえ、オレを襲いにきたんじゃないの？」

くうん、と鼻を鳴らすみたいに鳴く狼に、オレはそつと手を伸ばしてみた。

いくら、今こうしておとなしくしているとしても、昨夜のことを忘れることはできない。

この狼は、簡単に人間を殺すことができる生き物なのだ。でも。

そつと触れた毛並みは、思っていたよりもずつと柔らかくて、手触りがいい。

やわらかく撫でると、くうん、と狼はまた甘えるように鳴いた。

「…なんだ、気持ちいいのか？ おまえ人懐こいな」

思い切って両手でわしゃわしゃと頭を撫でると、狼は気持よさそうに体ごと擦り寄ってきた。

「わ、こら。重いよ」

体重をかけて押し掛かられて、オレは草地に倒れこんだ。

狼はザラリとした舌でオレの頬を舐める。

「わ、こら。ちょっと待ってよ。もうやめ。終わり、終わり！」

オレは狼の顔を押しつけて体を起こした。

狼もオレの言った言葉がわかったのか、おとなしく身を引く。

「…おまえがオレを襲うような奴じゃなくてよかった。昨日の夜の奴は、別人…じゃなくて、別狼なのかな」

オレはゆっくり立ち上がって、再び周囲を見回した。

足もとに落ちていた服を拾い上げる。

目が覚めたとき、掛けられていた服だ。

さつき狼の姿を見たとき、驚いて落としてしまったものである。

「…なんだろう、これ」

両手に持って広げてみたけど、見たことのない服だった。

「…服、…かな？」

ただの大きな布のように見える。

ポンチョに似てる気がするけど、生地の手触りはあまり馴染みのない触感だ。

「これ、誰かがオレに掛けてくれたんだよな」

目が覚めた時、オレは洞窟のようなところで寝ていた。

昨日の最後の記憶は、目の前で起こった惨劇だ。そして自分にゆっくりと近づいてくる狼…。

オレは急に、カクリと膝から力が抜けて、そのまましゃがみこんでしまった。

立ち上がる気力もなくて、自分の足に顔をうずめる。

「…ここ、どこだよ。どうしてオレ、こんなところにいるわけ。さっきの洞窟、なに。昨日の兵士もなに。タロウとジロウはどこだよ。」

…それに…みんな、どこ行っちゃったんだよお」

言葉に出して言うと、不安が大きくなって涙が出てきた。

物心ついてから、こんなふうに泣くことなんかなかった。

いつでも家族がそばにいて、十分すぎるほどの甘やかしてくれたから、不安で泣きたくなることなんてなかったのだ。

「…父さん…母さん」

帰りたい。

いつたいここはどこなんだろう。

オレは、まるで小さな子供が迷子になってしまったみたいに、
方にくれた。

第9話

あれは確か、小学校に入学する前のことだったと思う。母さんと一緒にデパートに買い物に行ったことがあった。確か兄弟の誰かの誕生日のプレゼントを買いに行ったのだ。

オレはその時、何かに気を取られてつないでいた母さんの手を離してしまった。

ふと気づき振り向いた先に、母さんの姿はない。

今から思えば、どうってことのない、誰でも一度は体験するような、ただの迷子だ。母さんがオレを残したまま先に帰ることもないし、一生家に帰りつけないなんてこともない。

でも、その時のオレにしてみれば、そんなことを冷静に考えられるような状態じゃなかった。

ひとりで公共機関の乗物にのったこともないような頃だ。

幼いながら、家まで帰るためにはどうすればいいのか考えてみた。

あの時はすぐに戻ってきた母さんがオレを見つけてくれたけど、今回はそう簡単にいきそうにはない。

何しろ、オレは自分がどこにいるのかさえ分からないのだ。

今更ここが母さんの田舎だとは思えない。

さつき見た景色がそれを思い知らせる。

どこまでも続く、広大な緑の大地。

いくら田舎だからって、あそこまで広い大地なんてあるだろうか？

そんなはずはない。

少なくとも、ここは日本じゃない。

どうしてオレはこんなところにいるんだろう？

もしかすると、昨夜、気を失ってしまっただけから、誰かに運ばれたんだらうか。

誘拐？

海外に連れてこられて、内臓でもとられてしまつのだろうか？

…ここは、海外…？

「そんなわけないって…」

自分で言つて、自分で笑つてしまった。

「はは、馬鹿みたい。この年で迷子だつて。自分がどこにいるのかも分からないだつて。…ほんと、…オレ、…どう、しよ、…」

最後の方は、声にならなかつた。

しゃべればしゃべるほど涙が止まらなくなつて、とうとうしゃくり上げるほどになつたのだ。

鼻水まで出てきて、息もできない。

しゃがみこんで泣き出したまま、立ち上がることもできないオレに、くうん、と甘えるような鳴き声呼びかけてきた。

そろりと視線を上げると、さっきの狼が、なんだか心配そうにオレを見ていた。

「…おまえ、…慰めてくれるのか？」

鼻声で声をかけると、まるで答えるようなタイミングで、狼はワーン、と犬みたいに鳴いた。

こんなに大きな狼なのに、鳴き声はタロウたちと変わらないんだ。そう思うと、なんだか少しおかしくて、しゃくりあげていた涙が少し止まつた。

「おまえ、…すっごくいい子。ありがとう、慰めてくれて」

オレは小さく笑つと、そつと狼の頭に触れた。

耳の付け根のあたりを撫でると、狼は気持よさそうに瞳をすがる。

尻尾がパタパタと揺れて、地面の草を叩く音がする。

「おまえ、…名前。そう。名前付けてもいいか？」

おまえとか、狼とか呼ぶのも変だなと思つて言つてみる。

言葉は分からないんだらうけど、またもタイミングよく、ワン、と鳴いたものだから、きつと了承の返事だと勝手に決めた。

何となくうれしくなつて、今泣いたカラスがなんとやら、を實踐して、笑顔になる。

さっきの涙とか鼻水のせいで、目も鼻も真赤だろうけど、ここにはオレとこの狼しかいないんだから、かまうまい。

オレは半ばやけくそ気味に思う。

空元気だと自分でも分かつていているけれど、それでもしないと、このまましゃがみこんで立ち上がれそうもない。

「でも、実はもう名前は決めてるんだ。っていうか、狼の名前っていえば、これしかないでしょ」

行儀よく、オレの横にお座りしている狼の瞳を見た。

すごく綺麗な琥珀色の瞳だ。

落ちついた、思慮深くさえ感じられる眼差しをしている。

「…本当に、おまえ、狼の王様みたい。な、おまえの名前、ロボ…つて、呼んでいい?」

言わずと知れた、「シートン動物記」に出てくる狼の名前だ。

オレの問いかけに、ロボはくうん、と甘えるように鳴いた。

その声が、とても立派な狼王とは思えなくて、オレはおかしくなってくる。

「なんか、タロウとジロウみたい。あいつらも、いつつオレが話しかけると、子犬みたいに甘えた声出すんだぜ」

話しかけるオレの言葉を、ロボは理解しようとするかのように、一生懸命聞いているように見えた。

まっすぐに向けられる琥珀色の瞳に、オレは何となく、ほんの少しだけ不安を忘れられるような気がする。

「…そうだよな。こんなところで、どうしようって座り込んでてもしょうがないよな」

このままここで途方に暮れていても、何の解決にもならない。

そう考えられるくらいには、落ちついてきたってことだろうか。

オレはゆっくりと立ち上がった。

今度は膝から力が抜けることもなく、しっかりと地面に立っ

る実感がある。

そうして、さっき地面に落としてしまった服を手に取って見た。

「…やっぱり、ポンチョ？ …だよな。なんか手作りな感じ」

オレはさっき出てきた洞窟の方を見た。

まるでファンタジー映画に出てくるような景色が、そこに広がっている。

オレが今いるのは、剥き出しの岩肌が聳え立つ、大きな岩山の、その中腹にある洞窟の前だ。

眼下に広がっているのは、地平線まで続く緑の森である。

「……………」

また、このままくじけてしまいそうになった。

ここはどこだろうとか、家に帰れるんだろうとか、考えると途方に暮れてしまう。

「…ロボ、とりあえず洞窟に戻ってみようか」

声をかけると、ロボは素直に立ち上がり、オレについてくる。

まるでオレの言葉が分かるみたいだった。

「おまえ、すっごくお利口さんなんだな。なんか嬉しい。ロボがいてよかった」

この狼のおかげで、さっきまでの孤独感が少しましになった気がする。

もし今も一人きりだったら、さっきしゃがみこんでしまったまま、動く気にはならなかったかもしれない。

オレはロボと一緒に洞窟に近づいた。

むき出しの岩山の下、一人一人がやっと入れるような、小さな洞窟というよりは洞穴って感じた。

「…ん？ 洞窟と洞穴ってどう違うんだ？」

思わずつぶやいた独り言に、ロボが不思議そうに顔を上げた。

「何でもないよ。…っていうか、何にもないよな」

洞穴の中には何もなかった。

たぶんオレが寝ていた場所が一番奥で、それもほんの数メートル

先だ。

「暗くてよく見えないし」

目をこらして奥を見てみたけど、特にこれといって何かがあるわけでもない、言ってみれば普通の洞穴だ。

何かを探すのをあきらめて振り向くと、目の前に広がる緑の、広大な森。

「……………」

オレは見えていられなくて、視線を足元に落とす。

「…………… 焚き火のあと？」

洞穴を出たすぐ横に、焚き火のあとがあった。昨夜見たのとそっくりだ。

「…あ！」

焚き火の横の壁に、立てかけるようにして昨夜も見た革袋がある。

つまり、気絶したオレを連れてきて、この服をかけてくれたのは昨夜あの場所にいた人物なのだろうか？

第10話

でも、オレはそのときのことはまったく記憶にない。

覚えているのは、突然襲ってきた兵士たちと、その兵士をあつさり沈めてしまった狼の姿。

あのときの恐怖がよみがえって、オレはブルリと震えた。

その時、急にロボが低い唸り声を上げる。

「ひっっ！」

まさに今、昨夜の状況を思い出しただけに、オレは引きつった声を出してしまった。

ロボはオレの横で低い唸り声を上げながら、少し先の木立の奥を睨みつけている。

オレもつられるようにそちらに視線を向けた。

崖に続く岩肌の道から、急に始まったような森の木立がある。でも、特に変わった様子はなかった。

朝の光に照らされた木立があるだけ。

でも、ロボは低く唸ることをやめない。

それどころか、警戒心も露わにして、きつく前方を睨み据えているのだ。

「あ……」

そして、オレも気づいた。

姿は見えないけれど、遠くからこちらに向かってくる音が聞こえるのだ。

そう、多分、これは馬の蹄の音、だろうか。

「どっしりよっ」

脳裏によみがえるのは、やはり昨夜のことだ。

思わず立ちすくんだオレを、ロボがゆっくり振り向いて、まるで隠れているとでも言わんばかりの様子で視線を向けてきた。

オレはそれに促されるように、ぎこちなく足を動かすと、洞穴の

中に逃げ込んだ。

とりあえずは隠れようと、それしか思い浮かばなかったのだ。

ロボはオレが洞穴に逃げ込んだのを確認すると、そのまま走りだした。

「あ…！」

止める間もなく姿が見えなくなる。

「ロボ…」

置いて行かれる。

オレは後を追おうかと思ったが、足が震えて動かなかった。

遠くから、馬のいななくような音と、獣の唸り声、剣をはらうような音が聞こえてきて、オレは洞穴の奥に逃げ込んでしゃがみこみ、両手で耳を押さえた。

何の音も聞きたくない。

聞こえてくる音が何かだなんて、想像もしたくはないのだ。

こんな怖いことは、きつと現実なんかじゃない。

そう思わないと、今にも叫び出してしまいそうだった。

きつく瞼を閉じて、ただ小さくなる。

何も見ないで、何も聞かないで。

どれくらいそうしていただろう。

ふと気づくと、耳を押さえなくても、何の音も聞こえなくなっていた。

「…ロボ？」

オレはそろりと目をあけて、周囲をうかがい見た。

そこには、何の変哲もない洞穴の姿があるだけ。

オレは恐る恐る立ち上がり、洞穴の入り口から外を見た。

しんと静まり返って、誰の姿も見えない。

「…ロボ？」

オレは不安になって呼んでみた。

ロボが何に気付いて、走り去った先で何があったのかは、想像するしかない。

昨夜のあの、兵士を簡単に沈めてしまった狼の姿を忘れたわけはなかった。

でも、それでもさつきまで側にいた、愛犬たちに似た姿を思うと側にいてほしいと思うのだ。

見知らぬ場所で、ひとりでいるよりはずっとましだ。

オレは意を決して、ロボが姿を消した木立に近づく。

岩肌の崖の横、唐突に森が始まっているような場所だった。

木々が鬱蒼と生い茂っていて、一步迷い込めば、元も場所に戻ってこられるのか不安になる。

…また迷子になりそう。

オレは後ろを振り返る。

切り立った岩山と、見下ろす広大な森。

むき出しの岩肌以外は、すべてが緑だ。

この一角だけが、ぽっかりと森が開けていて、緑が少ない。

「よし」

オレは決意を込めてこぶしを握りしめると、ゆっくり森の中に足を踏み入れた。

少し歩いたところで後ろを振り返ってみる。

さつきいた岩山が見える。

「…これなら大丈夫かな？」

昔、テレビか何かで見た記憶を頼りに、時々木の枝を折りながら進んだ。

迷子にならないための道しるべ。

でも、オレが進んでいるのは道とは言えないような道だった。

わずかに、誰かが踏みしめたように草がならされてはいるけれど、よく見極めないと、見落としてしまうものでしかない。

「ロボ…」

小声で名を呼んでみる。

なんとなく、大きな声で呼ぶのは危険なような気がした。

だって、よく考えたらロボのような狼がいるのだ。他にも危険な

動物がいるのかもしれない。

それに、いきなり襲ってきたあの兵士たちのような連中も、しばらく歩くと、振り向いても岩山は見えなくなった。

空を覆い尽くすような木々の隙間からは、木漏れ日が足元を照らしている。

「…なんか、だんだん暗くなってきたんですけど」

森が深くなる、という言葉を初めて知った。

まだ陽も高いのに、森の奥に行けばその陽光も入ってこなくなるのだ。

「…どうしよう」

オレは足を止めた。

これ以上奥に進んで、どうなるのだろう。

何の装備もなくこんな森に入りこんで、どこに行こうとしてるんだらうか。

「そういえばノド乾いた。…腹も減った……」

意識した途端、ぐう、と腹が鳴った。

「何か食べたい。っていうか、せめて水だけでも飲みたい」

オレは今度は意識して、周囲を見回した。水辺がこのあたりにないかと思ったのだ。

水音が聞こえないかと、耳を澄ませてみる。

遠くて、馬のいななきが聞こえたような気がした。

「……………あつちだ」

オレは迷いながらも、いななきが聞こえた方へ行ってみることにした。

本当は、怖い。

馬といえば、昨夜兵士たちが乗っていたのも馬だったし、さっき口ボが消えてから聞こえてきたのも馬の声だった。

この先に行けば、見たくないものをみてしまうかもしれない。

それでも、このままただあてもなく歩いて、迷子になってもしょうがない。

「でも怖いっつての」

オレは足音をたてないように近づいて行った。
薄暗い道とも言えない道をしばらく歩くと、予想通り馬がいた。

「あ……」

水だ。

馬は2匹いた。

小さなものだったけど、池があるのだ。

オレは周囲を見回した。

馬はいるけど、人の姿は見えない。

「ロボ？」

小さく名前を呼んでみる。

返事はない。

でも、馬はオレの声が聞こえたのか、ピクリと耳を動かすと、そのまま小さくいなないて走り去った。

オレは周囲を確認しながら、ゆっくりと水辺に近づく。

第11話

「……お腹、こわさないかな」

見た限り、池の水は澄んでいて、真水のように見える。

でも、池の水なんて飲んだことがない。

殺菌されていない水ってどうだろう。

まだ、湧水とかの清水だったらためらいも少ないだろうけど。

「煮沸すればいいかな。でも、火も鍋もないし」

どうして何にも持たずに来てしまったんだろう。せめてキャンプ用具一式があれば。

「そんなのおかしいって。オレ、犬の散歩に出ただけだし、……あ！」

思い出してポケットを探った。

「ワンコ散歩用ビニール袋！」

言わずと知れたフンの始末用ビニール。

でも未使用だからまだ綺麗だ。

「これに水を汲んで、さっきの場所まで戻って、火で煮沸したら飲めるかも」

焚火の跡のことを思い出す。

ビニール袋を広げて、池の水を汲もうとしたとき、背後で物音が聞こえた。

オレはビクリと肩が震える。

油の切れたロボットみたいな動きで、オレはゆっくりと後ろを振り向いた。

「！！！」

驚愕に瞳を見開く。

そこには人がいた。

金髪だ。

オレは彼を固まったまま凝視した。

ずいぶんと大きな男だった。

向こうもオレの出現に驚いたのか、動きを止めてオレを見る。見たこともないような服を着ていた。強いて言えば、映画に出てくるヒロイックファンタジーの世界の、旅人のような服装だ。

… どんどん現実離れしていく。

オレはもう、泣きたいような心境だった。

この深すぎる森も、昨日の兵士も、ありえないことばかりだ。

「*****？」

男が、静かな声で話しかけてきた。

そして予想通り、昨日の兵士同様に言葉が分からない。

男は随分と長身だった。

オレが平均身長より低いつてもあるだろうけど、見上げるほどの長身であることは間違いない。

淡い色の金髪は、短くカットされている。精悍な顔立ちは堀が深くて、かなり整っていた。

男はオレに分からない言葉で何かを話しかけながら、ゆっくりと近づいてきた。

オレは男が一步近づくと、一步後退する。

一步。そしてまた一步。

下がれたのはそこまでだった。

池の脇の木が邪魔して、それ以上下がることができない。左側には池、後ろは木、前方に男。右にしか逃げ道はないけど、そこは鬱蒼とした森だ。

オレはじつと男を見た。

何かを言い聞かせるように、オレに話しかけてくる。

「*****？ *****？」

語尾が上がっているから、オレに何かを問いかけているんだろうか？

理性的な瞳をしているような気がして、オレは逃げるのをやめて、話を聞いてみようかな、という気になった。まあ、言葉は通じない

んだけど。

それでも、たった一人でこんなところにいるよりはましだ。

男はオレが逃げないことが分かったのか、ゆっくりと近づいてきて、オレの少し前に立った。

「***? ***?」

男は屈んで、自分よりもずっと背の低いオレの目線に視線を合わせながら言った。

ゆっくりと、オレにも聞き取れるようにと話してくれているようにだけ、言語自体が理解できないから、あんまり意味はない。

でも、言葉のあとにつこりと笑った笑顔が、すごく人好きのするものだった。

「めちやくちやかっこいい」

思わずつぶやいてしまった。

近くで見た男は、本当に、本当にかっこよかったのだ。

彫りの深い顔立ち。綺麗な二重の瞳。

年は二十代中盤くらいだろうか。がっしりとした体系も、いかにも精悍で頼れる男という感じだ。

「***?」

「何言ってるか分かんないよ」

オレは困ったように言った。

本当に、まったく何を言ってるのかわからないのだ。

オレの言葉を聞いて、男も言葉が通じないことに気付いたようで、ピタリと口を閉じる。

そしてマジマジとオレを観察するように見た。

「…っていうか、ホントにあんたかっこいいや。その服、ロープレの剣士って感じ。…なんか、ホントに剣、持ってんだ」

オレは男が腰に剣を佩いているのを見て、何となくイヤな気持ちになる。

だって、銃刀法違反だよ。

こんな立派な剣、……ん？

何となく男の剣に見覚えがあるような気がした。

「あ……」

昨夜だ。

さ迷い出た焚火の側に置いてあった剣に似てる。

「**ヴ*、イ**」

じつと剣を見ていたオレに、男はなんだか一生懸命話しかけてくる。

「……？」

「イヴ*、イヴ…、…ヴン」

同じ言葉を何度も繰り返しているようだ。

男は自分を指さしながら言って、しばらくしてからオレを指さした。

「…名前？ 名前を聞いているの？ いぶん？ ……っていうのがあんなの名前？」

多分そうなんだろう。

オレは男のまねをして、彼に人差し指を向けた。

「…いぶん？」

何となくあやふやな発音で言うと、彼はにっこりと笑う。

「**、イヴン。**、イヴン」

何度も自分の名前を繰り返して、イヴンはそのままオレを指さす。その意味は明白だ。

「オレは、真白。大月真白。真白だよ。真白、真白、真白」

「…マ、ロ？」

イヴンは困ったように、自信なさそうに、オレの名前を呼んだ。どうやら、オレの名前は発音しにくいらしい。

「真白。真白だよ。マ・シ・ロ」

「マーロ？」

「真白」

「マ、マシユロ」

「真白」

イヴンは何度もオレの名前を発音しようとしたけど、どうしても言えないようだった。

オレがじっと見上げると、その視線を意識してるんだろう、何とか近い発音をしようとする。でも、どうやら「シ」の音が発音できないみたいだった。

困った表情で、それでも何とか発音しようとする様子を見ると、イヴンに対して感じていた怖さというか、警戒心が少し薄れていくような気がする。

名前ひとつで、ここまで一生懸命になってくれるって、すごい人かもしれない。

「もういいよ、マールで」

「マール?」

「そう。マール。…あの、きつとオレのこと助けてくれたんだよね? ありがとう、いぶん」

オレは自分から一步、イヴンに近づいて言った。

言葉は通じないかもしれないけど、でも、昨夜洞穴に運んで上着をオレにかけてくれたのもきつとイヴンだろうし、あの場所から連れ出してくれたのもそうだろう。

あの焚火の横に置いてあった剣を持っているのは、イヴンなんだから。

あの場所、と行って、兵士の死体を思い出してしまった。途端に気分が悪くなる。

「マール?」

心配そうな声で、イヴンが呼びかけてくる。

大丈夫と言いたかったけど、言葉が通じないので、オレは大丈夫だ、というように笑顔を向けた。

それにイヴンもホツとしたように笑みを浮かべる。

近くで見ると、イヴンの瞳はすごく変わった色をしていた。

金色というのか、灰色というのか、その二つが混ざったような不思議な色だった。

「ちょっとロボの色に似てる……」
言ってから、急に思い出した。

「ロボ！ ……ロボ、どこ……」

馬がいるなら、ロボが近くにいてもおかしくない。

オレはあの優しく可愛い狼の名を呼んだけど、ロボは姿を見せてはくれなかった。

第12話

「マーロ、***、***」

イヴンが何か話しかけてくる。

でも、正直分かるのは、オレの名前を呼んでるってことと、何か言いたいんだなあっていうことだけだった。

あの後、身振り手振りで意思の疎通を図って、何となくイヴンがオレを連れて行くことになることになった。∴のだと思う。

よく分からないけれど、イヴンがついて来いって感じの仕草をして、歩きだしたからだ。

道なき森の中の道を、イヴンは躊躇いもせず歩く。

着いた先は、さっきまでオレがいた岩山の洞穴だ。

イヴンは焚火の横に置いてあった革袋を手にとると、中から小さな袋を取り出した。

「マーロ、***」

差し出された小袋を受け取ると、どうやらそれは飲み物のようだった。革袋に飲み口がついていて、中に飲み物が入ってる触感だ。

「***、***」

イヴンは右手でグラスを持って飲むような仕草をした。そして同じ言葉を繰り返す。

「∴べべーる？ 飲む？ 飲むって意味？」

何となくそうかな、とあたりをつけて、オレは飲み口の蓋を開けた。

つい匂いを嗅いでみたけど、特に何の匂いもしない。革袋だから中身も見えないし、本当に飲み物なのかなあとも思ったけど、目の前でニコニコ笑ってるイヴンを見ると、まさか毒が入ってるわけでもあるまいと、ちよつとだけ中身を口に含んでみた。

「∴普通の水じゃん」

中身は本当に、普通の水だった。

ちょうど喉が渴いていたので、ゴクゴクと一気に飲んでしまった。
「ああ、おいしい。もう、めっちゃ喉が渴いてたんだ」

ぷは、と息をついて革袋をイヴンに返したけど、全部一人で飲みほしてしまってよかつたんだらうか？

「あ、：ごめん。いぶんも飲むよね、水、：えと、ベベーる？ その、全部飲んじゃってごめんなさい」

オレは上目づかいにイヴンを見上げた。

親切に水を分けてくれたのに、全部飲んじゃうって、オレ、かなり失礼じゃないだらうか。

でも、イヴンはまったく気にしていない様子で、にこにこ笑って、子供にするみたいにオレの頭をポンポンと軽くたたいた。

「***」

何を言ってるかは分からないけど、子ども扱いされているのだけは、何となくわかる。

イヴンはそのあと、固いパンのようなものと干し肉を分けてくれた。

：味は、まあ、おいしくはないけど。

でも、そうやって見も知らないオレに食料を分けてくれるその行為がすごく嬉しい。

正直、ひとりぼっちで見知らぬ場所で、途方に暮れていたオレは、今はもうイヴンだけが頼りなのだ。

イヴンはオレが食べるのを確認しながら、簡単に食事を終えたら荷造りを整えた。

そしてほとんど休むことなく出発。

イヴンは身振りで促しながら、オレについてくるように示した。

オレは促されて歩き出す。

イヴンがどこに向かっているのかは分からないけど、オレはもう、彼についていくしかない。

「マーロ」

イヴンが名前を呼ぶ。

時々振り向いて、彼はオレがちゃんとしてきているか確認してくれた。

オレはそんなイヴンにすごく安心する。

この人は、悪い人じゃない。

大丈夫。

そう思ったのだ。

でも、同時にイヴンは謎の人でもあった。

言葉が通じないこともあるけど、まず第一に、彼がこんな森の中で何をしているのかが分からない。

オレの感覚からいくと、イヴンは「旅人」って感じだけど、それにしてはこんな奥深い森に行くものなのかな、と思う。

何しろ、イヴンは道なき道を、突き進んでいるのだ。

どんだん森の深いところを歩いて行くのである。

正直、このままついていっていいのかな、と思うほど、先行きの見えない状態だった。

「でも、どこに向かってるにしても、ここが日本じゃないのは分かる……」

オレはイヴンの後を必死に追って歩きながら、あきらめたようにつぶやいた。

きつと、オレは扉を開けてしまったのだ。

昔、兄さんの本棚から拝借したSF小説。

扉を開けて、違う世界に行ってしまう話。

「そうじゃなきゃ、国際的な犯罪に巻き込まれて、海外に売られたとか」

ありえないけど。

オレは乾いた笑いを浮かべてしまう。

ここがどこにしても、今はイヴンを頼るしかなかった。

お昼と、あともう一度、二回の休憩だけであとはずっと歩き続け、日が暮れかけたころ、イヴンは森が少し開けた場所で止まった。

そこはやっぱり、最初に目覚めた岩山みたいに、小さな丘が壁の

ようになっていた場所で、イヴンは丘の影に荷物を下ろす。

「マール口、*****」

イヴンが振り向いて声をかけてくれる。

多分、ここで今日は野宿するとか、そういうことを言ってるのだと思う。想像だけだ。

「いぶん。ありがとう」

オレは通じないとは分かっていたが、お礼を言った。

イヴンはオレに身振りで、ここに座るように促して、手際よく火を起こす。

手荷物の中から、オレに再び干し肉とパンをくれた。

「……ありがとう」

オレは差し出された食事を受け取って、お礼を言う。

でも、歩きづめで疲れ果て、すぐに食べる気がしなかった。

正直、生まれてこの方、ここまで一日中歩きっぱなしだったことはない。

小学校の頃に行った、耐寒登山を思い出した。

あの時もかなりの時間を歩いたけど、今日の比じゃない。

オレはいかに自分が、運動不足だったのかと思いついた。

……だってしょうがないよな。文明社会に住んでると、公共機関が発達してるから、こんなに歩くことないし。

思わず自分に言い訳してしまう。

「*****？」

イヴンがそんなオレに、心配そうに声をかけてくる。

ぐったりと岩壁にもたれかかっているから、心配をかけてしまったようだ。

……いい人なんだよな。

オレは安心させるように笑顔を浮かべた。

「大丈夫。ちよっと、っていうか、かなり疲れたけど、ただ単にオレが体力ないだけだから」

イヴンはオレが笑ったことに安心したのだ、同じように笑顔を浮

かべた。

「***」

そして革袋を差し出してくれる。

「ありがとう」

休憩の時にも何度も貰ってるので、その中に水が入っていることは知っている。途中の川で、水を補充しているところも見ていた。オレは遠慮しつつも、つい喉の渇きに負けて、ごくごくと勢いよく飲んでしまう。どう見てもこの水を入れる革袋はそれほど大きくなかったし、一人用のものなんだとは分かっていたけど、あれだけ歩き続けると、どうしても喉が渴いてしまうのだ。

「…ごめん。またたくさん飲んじゃった」

それでもかなり遠慮はしているのだ。本当なら、袋の中に入っている水を全部飲みほしてしまいたいほど喉が渴いているのである。

「***」

オレが申し訳なさそうに革袋を返すと、イヴンは気にしなくないといとも言うように軽く首を振る。

「でも、水、大切なんだよな」

「***? ***」

イヴンの言葉はやっぱり、何を言ってるのかわからない。

「…あくあ? ぶれ?」

何とか聞き取ろうとしてみても、日本語とは根本的に発音の仕方が違うみたいで、よく分からない。

「…まだ英語だったらちよつとは分かるのに」

耳にしたことのない言語ってというのは、聞き取ることすら難しいんだって、初めて知った。

「だから、水。オレ、水、汲んでこようか?」

そうだ。自分で汲みにいけばいいんだ。

急に気づいた。

それに、少し戻ったところに小さな川があったことを思い出す。

「オレ、水。水、汲んでくるよ」

革袋を指さして言うと、イヴンは不思議そうな顔をした。

「だから、いぶん。オレ、自分で飲んだ分の水、汲んでくるから。ほら、10分くらい前歩いたところにさ、川あったじゃん。あそこだったら何となく一人でも行けそうだしさ」

空も言うほど暗くない。

まだ太陽は完全に沈んでいなくて、茜色が森を染めている。

これなら走って行けば、暗くなるまでにすぐ戻ってこれるだろう。

第13話

でも、イヴンはオレが何を言ってるのか、理解できないみたいだ。そりゃそうだろう。

「だから、水だよ。水。これ！」

オレは革袋を指さして、水、水、と繰り返した。

「***？」

イヴンは軽く眉をしかめてみせる。

「あぐあ？」

何となくさつき聞いた単語のようなきがした。

「あ！ 水？ 水のこと、あぐあっていうの？」

オレは今度は、革袋を指さして言ってみた。

するとイヴンは笑顔でうなずく。

そしてやっと気づいた、というような表情をして立ち上がった。

「いぶん？」

「マー口、**、水、****、**？」

イヴンはオレに何か言い聞かせるような口調で言うと、手早く枯れ枝を積んで焚き火を起こした。火打石みたいなもので簡単に火をおこす様子に感心する。

そしてイヴンはオレの前で革袋を軽く振って指を差し、そのまま指先を森に向ける。

「**、**」

「え？」

「****、マー口。水、***？」

イヴンは身振りで、たぶん、オレにここにいるように、と言った。そしてそのまま、さつき歩いてきた道を引き返していく。

「え、ちよつと。いぶん！」

声をかけると、イヴンは振り向いて、軽く手を振って森に消える。
「……………もしかして、水、汲みに行った？」

オレは呆然として言った。

自分で汲みに行くと言ったつもりだったけど、イヴンはオレが水をもっと飲みたいと言ってるとても思ってたんだらうか。

「…そういうつもりじゃなかったんだけど」

言葉が通じないっていうのは、なんて不便なんだろう。

これではまるで、オレが図々しく水を要求してみたのではないか。違うんだよ。っていうのは、どう言うんだよ」

オレは立てた膝にがっくりと顔をうずめた。

でも、行ってしまったものはしょうがない。今から追いかけてようにも、慣れたイヴンの足にかなうわけがない。

オレはさつきもらったパンと干し肉を口に運んだ。

保存食用なんだろう、パンはなんだかカンパンみたいな触感だ。

干し肉は燻製のビーフジャーキーみたいな味である。

咀嚼しているうちに、オレは心細くなってきた。

刻々と周囲が暗くなってきたからだ。

まだ明るいと思っていた日差しは、急速になくなっていく。森の木が邪魔して遠くは見えないけど、多分太陽が地平線に沈んで行ってるに違いない。

「いぶん」

オレは渡された食料を腹に収めると、イヴンが歩いて行った方向を見つめた。

水場はそんなに遠くはなかったから、すぐに戻ってきてくれるはず。期待を込めて見つめたけど、なかなかその姿は見えない。

そのうちに、完全に日が落ちたのか、周囲は真っ暗になってきた。イヴンが火をおこしていつてくれたから、完全な暗闇ではないけれど、それでも見えるのはオレが座っている周辺だけだ。

「電気がないと、こんなに真っ暗なんだ」

昨日の夜はもう少し空がよく見えて、月明かりで何とか周囲の様子を見ることができた。

でも、今いる場所は木々がかなり生い茂っているので、月も星も

よく見えない。この焚き火がなければ、本当に真っ暗になってしまっただろう。

オレは揺れる焚き火の炎を見ていたけど、一向にイヴンが戻ってこないことに、だんだんと不安が大きくなってきた。

「まさか、…置いて行かれたなんてこと、ないよな」

イヴンは食料の入った革袋を焚き火の側に置いていた。水を入れる袋と、もう一つの革袋は持って行ったけど、この食糧が入っている袋は置いているのだ。

食料を置いていなくなるってことはないだろう。

そう自分に言い聞かせていても、不安は去っていかない。

このままイヴンが戻ってこなかったらと、そればかりを考えてしまっただろう。

でもしばらくすると、木々をかき分けるような物音が聞こえた。

「いぶん！」

ほっとして振り向く。

しかし、そこにいたのはイヴンではなかった。

「……………ロボ？」

恐る恐る呼んでみる。

木立の影から姿を現したのは、金色の狼だったからだ。

正直、今ここにいる狼がロボなのかどうか、この薄暗い中では見分けがつかなかった。

でもそんなオレの呼びかけに、くうん、と甘えるような声で鳴いて、ゆっくりと近づいてくる。

「ロボ、…だね」

オレはほっとしたように息をついて、尻尾を振りながら歩いてくるロボを両手を広げて迎えた。

「どっしたんだよ、おまえ。昨日はいつの間にかいなくなっちゃったわ」

ぎゅっとロボの首を抱きしめると、ロボはおとなしくオレの腕の中で、くうん、と甘えたように鳴いた。

オレはロボを隣に座らせて、柔らかい手触りの毛並みを撫でる。
ロボがペロリとオレの頬を舐めた。

「わ。こら。くすぐりたいよ」

オレは笑いながらロボの顔を押しつけようとしたが、逆に押し返されてしまって、そのまま後ろにごろりと転がる。

「ちょ、…ロボ！」

大げさなくらいに喜びを表現しているのか、ロボはオレにのしかかるような状態だ。はたから見れば、まるでオレが襲われているように見えるんじゃないだろうか。

でも、勢いよく振られる尻尾といい、顔中嘗め尽くす勢いの舌といい、とにかく甘えられているのは間違いない。

「って、こら。よだれでドロドロだったの。もうやめ。やめなさい！」

普段愛犬たちを叱る口調で言っつて、オレは強引にロボの顔を両手で押しのけた。

くうんと情けない声を出して、ロボは素直に身体をどける。

「よしよし。いい子、いい子」

オレはゆっくり起き上がると、手にしていた干し肉を差し出した。「少ししかないけど、食べるか？ お腹すいてる？」

イヴンにもらったものだけど、今のオレにはこれくらいしかあげられるものがない。

ロボは干し肉をチラリと見たけど、どうやらお気に召さなかったようで、食べようとはしなかった。

「それにしても、どこに行ってたんだよ？ オレ、あの後すつごく探したんだぜ？」

ロボの顔を両手で支えて、覗き込むように見つめながら言っつと、まるでオレの言葉が分かっているかのように、申し訳なさそうにロボがくうん、と鼻を鳴らす。

綺麗な金色の瞳がオレを見て、ごめんね、とでも言っているように見えた。

「ま、いいよ。結局あの後、イヴンに会えたからさ。あ、イヴンっていうのはオレを拾ってくれた親切な人。正直何者なのかは分からないんだけど、でも、何となくいい人っぽい。これでもオレ、人を見る目だけはあるんだぜ」
多分。

今までののんびんだらりとした生活の中では、悪人と出会っ確率なんて、かなり低かったけど。

そうやって、平和に暮らせていたのも、いい人たちに囲まれて生活できたのも、オレがそう選んだ結果のはずだ。

大きな目で見れば、人を見る目があると言えなくはないはず。

そんなオレの心の中が見えるのか、ロボは何となく、意地悪そうな表情をした気がした。

「狼に表情なんてあるのかな。あ、目がそう言ってる感じがするのかも。ロボ、オレのこと馬鹿にしてる？」

ちよつと怒ったように声をかければ、ロボはわざとらしく視線をそらした。

本当にオレの言葉が分かっているような反応だ。

「もう、ホント、ロボってかわいい！」

オレは両手でロボの首筋をワシヤワシヤと撫でた。

第14話

ロボは猫みたいに、気持よさそうにゴロゴロと喉を鳴らす。

「でも本当にロボ、オレの言葉分かってる？　もしかして言葉を理解する狼とかが存在する世界だったりして？」

オレは今まで見てきたゲームや漫画のことを思い出す。

半獣とか、あり得る話だ。

「ロボ、おまえって喋れたりしないの？　オレの名前とか言ってみてよ。オレ、真白だよ。大月真白。マ・シ・ロ」

ロボに向かって真剣に言ってみたけど、困ったようにオレを見返す視線に、さすがに自分のやっтерことが馬鹿みたいに思えた。

「ごめん。ロボが話せたらいいなって思っただけ」

オレは苦笑すると、ロボの首筋に手を添えたまま、ゆっくりと立ち上がった。

つられるようにロボも姿勢を正して、急に耳をピンと立て、せわしなく動かす。

「ロボ…？」

急にロボは緊張したように尻尾を固くして、喉の奥で唸り声を上げた。

「なに？　…なにか、いるの？」

不審者に対するようなロボの姿に、オレは不安が込み上げてくる。思い出すのは、剣を持った兵士の姿だ。

ロボと兵士たちが争っているのを見たのは、つい昨夜のことである。

思い出すと足が震えた。

ロボは鼻先でオレの体を押して、岩の脇の茂みに押し込んだ。

「ロボ？」

不安げな声が出た。

ロボはオレのそんな瞳をじっと見て、隠れている、とでも言うよ

うに小さく鳴くと、そのまま踵を返して去って行ってしまった。

「あ、口ボ！」

オレは一瞬追いかけてようと腰を浮かしたけど、兵士の存在を思い出すと足がすくんでしまう。

結局、そのまま口ボが押し込んだ茂みの中にしゃがみこんだ。

「…どうなってるんだろう」

なかなか戻ってこないイヴンのことも気になった。

水を汲みに行っただけなら、もう戻ってきてもおかしくない頃だ。それとも、あの兵士たちに見つかったんだろうか？

「まさか」

否定の言葉を口にして見たが、改めて考え直すと、もしかと思いついた。

あの兵士たちは、イヴンを追いかけているんじゃないだろうか？そう考えれば、行く先々で兵士の姿を見かける理由に納得がいく。イヴンは親切な旅人だと勝手に思っていたけど、お尋ね者なんだろうか？

何が正しいかなんて、オレには分からない。

まったく知らない場所で、やさしくしてくれたイヴンを信じたのが間違いだとは思いたくない。何より、イヴンからはイヤな感じを覚えたことがなかったのだ。

…オレは、少なくとも善人かそうじゃないかくらい、見分けることができる。

はず。

だんだんと自分に自信がなくなってきた。

それから、どれくらいしゃがみこんでいたのか、オレは近づいてくる蹄の音に、ビクリと身体が震えた。

まだイヴンは帰ってこない。

兵士がまたやってきたんだろうか？

オレは恐る恐る、茂みの蔭から覗いてみた。

「マー口…」

そこにいたのは、何故か馬に乗ったイヴンだった。
歩いて水を汲みに行っただはずなのに、どうしたんだらうか？

イヴンは馬上でゆっくりと周囲を見回している。多分、オレを探しているのだらう。

「いぶん」

オレはゆっくりと茂みから抜け出して声をかけた。

「マーロ！　***、**」

イヴンはホツとしたような声でオレを呼ぶと、ヒラリと馬から飛び降りた。

そうして焚き火に砂をかけて火を消して、手際良く荷物を馬の鞍にくくりつける。

「マーロ、***、**」

イヴンはオレに手を差し出すと、身振りで馬に乗るように言った。

「え、出発するの？　てか、野宿じゃなく？」

オレは何が何だかわからないまま、イヴンに引き上げられ、馬に乗る。

「うわ。たか！」

初めて乗った馬は、思っていたよりずっと高くて、その上バランスを取るのが難しい。

イヴンが後ろに乗って支えてくれているから何とかなるけど、一人ならとてもじゃないけど乗馬は無理だ。

「マーロ、***、**」

やさしくオレの名前を呼んで、イヴンは何事かを話しかけると、手綱を引いて馬を走らせる。

「うわ！」

オレは慌てて馬のたてがみにしがみ付いた。

暗闇の中、月明かりだけを頼りに走りだす。でも、手綱を握るイヴンは、迷いなく馬を走らせた。

まるで何度も走り慣れた場所に行くかのような足取りだった。

第15話

どこか高いところから落ちるような感覚に、ビクリと体が震える。震えた身体に、急に目が覚めた。

「…あ？」

パチパチと瞬いて、ごろりと寝返りをうった。

「ここ、…どこ？」

オレは目に入った光景に、驚いて起き上る。

外ではなく、室内だったからだ。

「あれ？…どうしたっけ？」

首をかしげつつ、オレは部屋の中を見回した。

最後の記憶は、イヴンと一緒に馬に乗ったこと。

「あの後、オレ、…寝ちゃったのか？」

とにかく、必死に馬のたてがみにしがみ付いたのは覚えている。

月明かりの下、イヴンは道なき道を疾走した。オレだったらあんな薄暗い道を、ライトもなしに馬を走らせるなんて芸当はできない。

いや、多分イヴンは以前にもこの道を通ったことがあるんだろう。そんな感じの走り方だった。

ただ、とにかくひたすら走っていた気がする。時々スピードが落ちることはあったけど、とにかく走り続けた。お尻が痛くなるほどの時間である。

変な力が入っていたのか、今はわき腹や腹筋も痛かった。完璧な筋肉痛である。

お尻が痛い、…と、思って、ついイヴンに寄り掛かった。

覚えているのはそこまでだから、オレはあんな状態で眠ってしまったということだろう。

ある意味、自分に拍手、だ。

最後の方で、走るスピードが落ちた気はするけど、乗馬したまま眠れるなんて、オレってかなりの神経をしてる。

「よっぽど疲れてたのかも…」

一日中歩き詰めつていうのは、生まれて初めてかもしれない。今まで学校の遠足で出かけた時も、家族で登山をした時も、これほど歩いたことはなかったのだから。

「だから、オレは文明社会に住む現代っ子なんだよ」

ため息とともに呟いて、オレは改めて室内を見回した。

オレが寝ていたのは、ベッドの上だった。

ベッドとはいっても、板の上に布を何枚重ねて、シーツで覆っただけの、すごく簡単なものだ。スプリングのきいた自分のベッドと比べると、硬すぎて決して寝心地のいいものじゃないけど、昨夜のように野宿するよりはずっとましだ。

部屋はすごく狭い。

ほとんどベッドだけ、といっても過言ではない狭さである。

畳で言えば四畳くらいの広さだろうか？

ベッドがあつて、小さな木製の机と椅子。

部屋が明るいのは、窓の隙間から外の明かりが入ってきているからだ。天井を見ても、蛍光灯のような電化製品はない。

「…もう朝なんだ」

オレは筋肉痛で痛む身体を叱咤して、ゆっくり起き上った。

ベッドの下には靴がちゃんとそろえて置いてある。

夏休みに入つてすぐ、母さんと出かけたときに勝手もらったナイキ。

何だろう、泣きたくなってきた。

いったい自分はどこにいるんだろう。

ちゃんと家に帰れるんだろうか？

不安で不安でしようがない。

昨日、一生懸命にイヴンについて歩いていた時は、それだけでいっぱいで不安を忘れていられたけど、やっぱり、ずっと忘れていることなんかできない。

オレは小さく息を吐いた。

落ち込んでいても、どうしようもないってことは分かっている。どんなに信じられない状況でも、今、ここにいることが現実なのだ。

オレは靴をはくと、部屋を出てみることにした。

木製のドアを開けると、外には廊下が続いていた。

「石造りなんだ」

今寝ていた部屋もそうだったけど、壁や床、天井までもが全部石でできている。

廊下には部屋にあったような木製の窓がいくつもあって、開け放たれたそこから外の明かりが差し込んでいた。

オレは窓から外を覗いてみた。

「うわ……」

そこから見えたのは、はるか遠くまで見渡せる大地だった。

地平線が見える。

こういう景色を、オレは以前テレビで見たことがあった。

「サバンナみたいだ」

何となく、草原と、地平線と、底に沈んでいく夕陽を想像した。

全部テレビで見ただけの知識だけ。

オレはしばらく窓の外を眺めてから、イヴンを探すことにする。

ここに連れてきてくれたのは、イヴンのはずだ。言葉が通じるわけじゃないけど、どういふことなのか聞こうと思った。

廊下を歩きだすと、探すこともなく、角を曲がったところで、こちらに歩いてくるイヴンを見つける。

「いぶん！」

オレはホッとして、イヴンに駆け寄った。

「マーロ、***」

イヴンはにっこり笑ってオレの名前を呼ぶ。

なんとというか、イヴンの整った容顔で微笑まされると、差し込んでくる朝の光もあってか、とにかくキラキラしていた。

イヴンはやさしい笑顔のまま、オレの肩に手を置いて、こっちだ

よ、とても言うように歩きだした。

「いぶん？ どこ行くの？」

オレは促されるまま歩きだす。

イヴンは迷うことのない足取りで廊下を進み、何度か角を曲がると、突き当たりになった部屋に入った。

この建物がどれくらい広いの広さかは知らないけど、少なくともオレが知ってる普通の家っていうレベルでないのは分かった。

でも、全部が石造りになっていて、寒々しい感じがする。

「これ…」

オレはイヴンが指示した部屋にあったものに、あつと声をあげた。

「お風呂だ！」

そこにあつたのは、銭湯ほどの広さがある湯船だった。

今までの建物の延長のような、石造りで、すごく簡易なものだったけど、お風呂ってだけですごくありがたい。

「入っていいの？」

イヴンを見上げて言うと、にっこりと笑顔が返ってくる。

「マージョ、*****」

イヴンはお風呂の手前にある壁の棚を指差した。そこには木製の棚があつて、着替えらしきものが置いてあつた。

「お風呂がここで、着替えがここってこと？ ……だよ。わかった」

オレはイヴンを見て、理解したというのがわかるように、大きく頷いて見せた。

イヴンはオレの頭をポンポンと撫でると、部屋の外を指さして出て行く。

「…外で待ってるってこと？」

言葉が通じないっていうのは、本当に不便だ。

オレはイヴンの行動から何となくそうだろうとあたりをつけて、とにかく風呂に入ることにした。

もう二日も入ってない。その上、一昨日は野宿だし、昨日は一日歩き詰めだ。

オレはシャツとジーンズ、下着と靴を勢いよく脱いで、湯船に向かった。

指先で触れると、すっごく温かったが、それでも一応お湯である。オレは周囲を見回してみたけど、どうやら湯桶も石鹸もないようだった。

「お湯なだけましってこと？」

しょうがないので、オレは申し訳ないと思いつつ、そのまま湯船に入った。

根本的にお風呂に対する概念が違うのかもしれない。

オレにしてみれば、二日も洗ってない身体のまま湯船には入りたくないんだけど。

「生き返る〜」

でも、そんなことを気にしていたのは、湯船に入るまでだった。

お湯の温度はかなり低かったが、それでも二日ぶりのお風呂はすごく気持ちいい。

オレは湯船の中で体中を擦った。

手、足、髪の毛。

石鹸がないのが不満だったけど、それでもお湯で汚れを落とせただけで全然違う。

途中でさっき脱いだ服も湯船に入れて洗った。

「あゝ、さっぱりした！」

オレは思う存分お湯を満喫してから浴室を出た。

第16話

用意された布で身体を拭いて、同じく用意されていた服を手にする。どこにでもあるようなシャツとパンツだ。

着ていた服は洗ったばかりでとても着られる状態ではないので、ありがたく借りることにする。

「微妙？」

シャツは綿のような生地。下着もそう、ズボンは同じような生地の黒だった。

着てみると、どちらもかなり大きい。もともとオレは同世代の平均身長には足りない体型だったけど、この服を着るとまるで大人の服を着ている子どもみたいだ。

「ウエストむりだつて」

ズボンは腰で履くという以前に、大きすぎてストンと下まで落ちてしまう。

オレはさっきまで履いていたジーンズのベルトで無理やり腰で止めて、引きずるズボンの裾と、指先すら出ないシャツの袖を折り曲げた。

「…カッコワル」

シャツは一番上までボタンを留めても、襟ぐりが大きく開いて、肩まですり落ちてきそうである。

オレはぶかぶかの服を引きずるようにして風呂場を出た。

急いだつもりだったけど、つい念入りに体を洗ったので、思ったよりも時間が経ってしまったと思う。

「いぶん…？」

廊下に出て、そつと名前を呼んでみた。

しかしそこにイヴンの姿はなく、代わりに知らない男が立っていた。がっしりとした大男で、おそろおそろ見上げたオレを、睨むように見下ろしてくる。

「……っ」

「こわ！」

ものすごく目付きの悪い男だった。その上体格もいいから、とにかく雰囲気からして恐ろしい。

それに、よく見れば男の服装は制服のようだった。制服というよりは、軍服、だろうか。

その様子を見てみると、脳裏によみがえってくるのは、馬に乗った兵士たちの姿だ。

甲冑は着けていないけれど、目の前の男からはあの兵士たちと同じ匂いがした。

「イヴン*****、マーロ**、***」

男はオレを見下ろしながら、低い声で何か話しかけてきた。

「え？」

もちろん言葉は分からない。

でも、オレが理解したかしてないかなんて、どうでもいいかのようだった。億劫げについて来いと言うように顎を振って、男は背を向けて歩き出す。

オレがついてくるかどうかも、どうでもいいようである。

ぼんやりと男の背をしばらく見つめて、オレは慌ててそのあとを追った。

イヴンとオレの名前を呼んでいたのはわかったから、きっとイヴンがオレを案内するために待たせてくれていたに違いない。

男は普通に歩いているのに、オレは小走りで必死についていく。

何だかわからないけど、少なくともこの男がオレのことをあまりよく思っていないのは分かった。

向ける視線も厳しいし、さっき話しかけてきた口調もすごくぶっきらぼうだった。何より、一度も振り返る様子なく、オレが必死になつて走つてついて行つてもどうでもいいようだった。

男は石造りの廊下をせかせかと歩き、階段を上る。後をついて上るけど、昨日の無理からきた筋肉痛で、階段を上るのがつらい。

なのになんといふんと上の階まで連れて行かれた。そしてスピードを落とすことなく歩く男に続き、5階まで登ったところで、やっと目的地に着いたのか男の歩みが止まる。

情けないことに、オレはせえせえと肩で息をしていた。一気に階段を5階まで登るなんて、普段はしない。そう考えると、今までの生活は随分と楽をしていたんだなあとと思う。

5階に上った途端、今まではむき出しだった石造りの廊下に絨毯が引いてあるのが見えた。

周囲の雰囲気も先ほどまでとは違い、花が飾ってあったり、壁に絵がかけてあったりと、少し豪華になっている。

「**、イヴン**、マーロ****」

オレが肩で息をしているのもまったく無視で、男はドアのノックして声をかけた。

すぐに中から返事があつて、男はゆっくりドアを開く。

そこでやっと、ぐったりしているオレを振り向いた。

「**、マーロ****」

ドアを抑え、ポーズだけは恭しくオレを室内に促すように腕の動きで促された。

オレは男の馬鹿にしたような視線にムツと腹を立てつつも、入口をくぐる。

「マーロ」

途端、椅子に座っていたイヴンが立ち上がり、にっこりと笑みを浮かべて近づいてきた。

「**、**、****？」

何を言ってるのかはやっぱり分からないけど、きっと大丈夫か、というようなことを聞かれている気がした。

「お風呂、ありがとう。服も、…ちよつと大きいけど」

オレはぺこりと頭を下げてイヴンを見上げ、ずり落ちそうな服を引っ張って苦笑した。

それにイヴンも笑う。同じようにオレの服を引っ張ると、大きか

ったね、というように口元だけで笑った。

「マーロ、***？ ***」

イヴンはそのままオレの肩を抱いて、隣の続き部屋に連れ言った。

「あー！」

そこにはテーブルがセッティングされていて、その上にはおいしいそうな食事が乗っている。

ちゃんと食器に盛られた、調理されたものだ。

「**、マーロ」

イヴンはオレを椅子に座らせると、どうぞ、というように料理を指し示す。

昨日はイヴンに分けてもらった携帯食料しか食べていなかったの
で、正直かなり空腹である。なにより、きちんと調理されている食
事というのがありがたかった。

「食べていいんだよね？」

イヴンに確認をとるように視線を向けると、大きくうなづいてく
れた。

言葉は通じなくても、ボディランゲージで、それなりの意思疎
通はできる。

オレはテーブルの上にあるフォークとナイフを手に取った。食器
は、オレが知っているものと同じ形をしている。

マナーも何もあったものじゃない感じで、オレは目の前の料理に
夢中になった。

やっぱり、携帯食料は食べた感じがしない。それなりに栄養はあ
ったかもしれないけど、食事をしてるといふ実感がなかったのだ。
ただの栄養補給。そんな感じだった。

でも、今日の前にある料理は、美味しく味付けされて、オレのた
めに用意されたものだ。

おいしくないわけではない。

「うまー！」

自分でもみっともないくらいがついていたかもしれない。

ひたすら食べて、お腹が落ち着いてきてやっと、オレは正面に座った。イヴンが面白そうにオレを見ていることに気付いた。

「う……」

向けられる視線に、オレはふと我に返って赤面する。

欠食児童じゃないんだから、もうちょっとマナーを守って食べればよかったんじゃないだろうか。

オレは今更遅いと思いつつも、せわしなく動かしていたフォークを置いて、背筋を伸ばした。

「マール、水***？」

イヴンがグラスに水を足してくれた。

昨日覚えた水という単語だけ聞き取れる。

「……言葉覚えないと、やっぱりだめだよな」
本当に実感する。

コミュニケーションに言葉は大切だ。

何を言ってるのか分からなければ、多分こうだろうとか、憶測するしかなくなる。そんなことで正確に意思の疎通ができるとは思えない。

「いぶん、しばらくここにいるの？ いるんだったら、オレ、言葉を勉強するよ」

訴えてみたけど、イヴンはオレの言葉が分からずに困ったような表情になる。

オレも、どうすれば自分の意思がイヴンに伝えられるのだろうと途方に暮れそうだ。

それにしても、イヴンはいったいどういう人間なんだろう。

第17話

こんな見知らぬオレみたいな奴を拾ってくれて、親切にしてくれて、こうして人のいるところまで連れてきてくれた。

謎の兵士に追われているようなのも気になったけど、この建物にきてからのことも気になる。

さっきの男や、この部屋の待遇をみても、きっとイヴンはかなり偉い人なんだと思う。

イヴンのいるこの部屋は床には毛皮や絨毯が敷かれ、調度品もかなり豪華なものがそろっている。用意されていた食事もかなりの量だし、手の込んだものだ。

テーブルの上にはピッチャーのような容器が置かれ、中には水がなみなみと入っていた。

当然のように用意されていることから、イヴンが特別な存在であると分かる。

： お金持ちっていうよりは、身分が高いって感じ？

「***、***！」

ぼんやりとしてイヴンを見ていたオレは、急にイヴンが外に向かって声をかけたのではっとした。

イヴンの呼び掛けに、先ほどの男が静かに部屋に入ってくる。

「マーロ」

ゆっくりと椅子から立ち上がり、イヴンがオレの名前を呼んだ。

「マーロ、***、ビガス。ビガス・***」

イヴンは男を指さしながら、何度も同じ言葉を繰り返す。

「：びがす？」

前を出すと、イヴンがにっこりと笑う。

多分、この男の名前なんだろうとは思っけど、どうしてオレに教えるんだろう？

どう見ても、この男、ビガスの方はオレと親しくなりたいように

は見えない。

「ビガス、****、…、マール」

イヴンは何事かビガスに言っていると、再びオレを振り向いて、静かな声でオレの名前を呼んだ。

ドキッとするような、まっすぐな視線が向けられる。

イヴンは、いつの間にか足元に置かれていた革の鞆を手に取り、一緒に置いてあったマントをはおる。

「え…」

そして腰に剣を佩き、もう一度オレを見て、ビガスを見た。

「マール、****、****、****」

イブンはゆっくりと、子供に言い聞かせるような口調で何かを言った。

オレの頭をポンポンと軽く撫でて、もう一度「ビガス」と、男の名前を繰り返す。

「ちよつと待ってよ、いぶん」

切羽詰まった声になったと思う。

言葉は通じなくても、イヴンの言いたいことは何となくわかった。

イヴンは、この場所を出発しようとしているのだ。

鞆を持ち、マントをはおり、腰に剣を佩く。

そして、オレにはビガスの名前を何度も繰り返すのだ。

「オレを置いて行くの？」

そうなのだろう。

イヴンはオレをこの場所に置いて、目的の場所に向かうのだ。

もしかすると、ここに寄ったのも、オレのためなのかもしれない。

あのままでは森で遭難してしましそうだから、ここまで連れてきてくれたのか。

「…やだよ」

頭ではイヴンの言いたいことを理解したけど、ここに残されるのは嫌だった。

イヴンとも知り合っただけだけど、もっと見知らぬ人しかいな

い場所に残されるのはイヤだ。

「オレも連れて行って。がんばって歩くし、馬も我慢するからさ！」
イヴンを見上げて、マントをギュッと握る。

それにイヴンは困った顔になった。

「マーロ、***、**」

子供にするように、よしよしと頭を撫でられる。

オレは、イヴンが困りながらも、オレを連れて行く気はないのだと、雰囲気を感じてしまう。

「ビガス、***、マーロ***」

イヴンはオレに再びビガスを指示して、オレの頭を撫ながら、同じ言葉を繰り返した。

オレは教えられなくても、多分その言葉が『ごめん』という意味じゃないかと分かってしまった。

イヴンの好意でここまで連れてきてもらったオレが、それ以上の我儘を言えるわけもなく。

「…わかったよ。…ここにいる」

オレは諦めたように呟いて、イヴンに笑って見せるしかなかった。

馬に乗って出発するイヴンを見送って、オレはこの場所にひとり取り残された。

イヴンを見送る時に外まで出て、初めてこの石造りの建物が『砦』なのだと気づく。

それこそロールプレイングゲームに出てくる、辺境の砦そのものだ。

この建物に女性がいない理由も、それだと納得がいった。

国境警備か何かの詰め所のようなものだろう。きつと兵士が交代で見張りをしているに違いない。

あながち、そう外れた想像じゃないと思う。

この砦は、ちょうど森と草地の境目に建てられている。きつと森が内で、草地は外なんじゃないだろうか。だから、内である森に誰かが入りこまないように、この砦で監視しているんじゃないか。しょせんは現代っ子の寄せ集めの知識でしかないけど、ファンタジー小説やアニメでは定番の設定だ。

オレはそこまで考えて、大きなため息をついた。窓の外に見える景色は、うっそうと生い茂った森。ただそれだけ。日も沈んでしまった今となっては、森どころかただの暗闇しか見えなかった。

イヴンが朝出発して、残されたオレはビガスに連れられ、最初目が覚めた部屋まで戻された。

そのままただ放置されて、一日が終わったのだ。昼と夜、食事だけはビガスが持ってきた。

でもそれだけで、会話やボディーランゲージひとつない。

ビガスはただ淡々と、義務のようにオレに食事を運んできただけだった。

最初は、もっと他に誰かいないのかと建物の中をうろついてみたけど、誰もかれもがビガスのような奴ばかりだったのだ。

軍服をきた、体格のいい男たちばかり。

胡散臭そうに見られ、中には不信感もあらわに、睨みつけてくる奴もいた。

オレは早々に部屋に引きこもり、それ以降ほとんど部屋からは出ていない。

「…どうしよう」

オレは夜空を見上げた。

満天の星を眺めると、少しだけ気分が晴れる。

この眺めは、日本には味わえないものだ。

「天然プラネタリウム…ってね」

オレは再び大きなため息をつく。

いくら食べるに苦労はしないといっても、こんな雰囲気場所に

オレはいつまでいなければいけないんだろう。

イヴンは『用事』が終われば、オレを迎えに来てくれるんだろうか…？

あるいは、オレはもうずっとここにいないといけないんだろうか？
それはさすがにぞっとする想像だった。

「帰りたい…」

再び夜空を見上げると、涙がこぼれそうになる。

三度、ため息。

そのとき急に、目の前の木々がガサリと揺れた。

「…？」

風も吹いてないのにといいながら視線を向けると、暗闇のシルエ
ットの木立が揺れた。

そして月明かりの中、ゆっくりと茂みから一匹の狼が姿を現した。

「ロボ！」

さすがにもう見間違えはしない。

そこにいたのは、昨夜別れたロボだった。

第18話

ロボはくうん、と小さく鳴き声を上げると、オレの方をみて近づいてくる。

そしてヒラリと軽い動きで窓に飛び上がってきた。

「わー！」

ロボの大きな足が窓の棧にかけられて、ぐいと上ってきた。

部屋の床に降り立ったロボは、ぶるぶると軽く身体を震わせてから、当然のように硬いベッドの上に乗るあがる。

べつたりと身体を伸ばし、くつろいだ様子でごろりと身体を伸ばした。

「ロボ…？」

オレは突然のロボの訪問に、驚いたような嬉しいような気持ちになる。

「どうしたんだよ、おまえ。昨日は大丈夫だったのか？」

オレはロボの寝ころぶベッドの上に強引に腰をおろして、ピタリとロボにくっついてみた。

「なんか、ロボっていつも突然だな。突然現れて、すぐいなくなつて。…でも、来てくれて嬉しい」

オレはロボの背中に手を置いて、手触りのいい毛皮を撫でた。

「ロボってすごくお洒落？ めちゃくちゃ手触りいいし」

ロボはどちらかと言えば長毛種だ。それもとても毛並みがよくて、サラサラでふわふわ、いつまでも触っていたくなるような触感である。毛艶もよく、汚れやほこりもまったくくない。

普通、野生の動物ならもっと汚れていても不思議じゃないと思うのに、ロボはまるでシャンプーした後のような手触りだ。

「おまえ、誰かに飼われてるの？」

飼い主が、ロボを綺麗に洗ってあげているのなら、納得がいく。飼狼？

聞いたことはないけど、ここは日本じゃないから、そういうこともアリなのかもしれない。

でも。

「…なんかヤダな…」

ロボが誰かに飼われてると思うとおもしろくなかった。いや、むしろキツパリ不愉快だ。

オレはだらりと寝転がるロボの背中から腹にかけてわしゃわしゃと両手で乱暴なくらい撫でてやった。

よく愛犬のタロウとジロウにする行為だ。するとロボは、愛犬たちと同じように腹を見せて、もつと撫でろと要求する。

「かわいい…」

ロボはまるで満足しきった猫みたいに喉をならし、気持ちよさそうに瞳を閉じている。その満腹顔がかわいかった。

まだ会ったばかりなのに、ロボはまるでそうするのが当然のようにオレに許してくれる。

なんだか無性にロボがかわいくなって、オレはそのままロボの腹にぎゅゅつと抱きついた。

くうんと鼻で鳴いて、ロボは顔だけ起こしてオレを見る。

ロボからお日様みたいないいにおいがした。

何ともいえない、すごく安心できるにおいだ。夜、自分の布団にくるまって、慣れたにおいにホツとするのに似てる。

オレはロボの腹に、いっそう自分の鼻先を押し付けた。

「オレ、どうしたらいいんだろう…」

ロボに抱き着いたまま、ぽつりとつぶやいた。

今日一日、何もせずに部屋にこもっていたので、考える時間だけは腐るほどあった。

だから、ここに来てからのことを最初から考えてみたのだ。

まず第一に、ここは日本じゃない。

分かりきったことでも、一番信じられない、信じたくない事柄だ。いったいいつから日本じゃなくなっただのか。どう考えても分から

ない。最初に自分が歩いていたのは祖父母の家のすぐ横だったはずだ。あの馬鹿男に追いかけて森に入ったが、だからといって徒歩でそんな遠くにいけるわけがない。

ただ、今から考えると、あの時タロウもジロウも追ってこなかった。普通なら、すぐに追いついてきてもおかしくないのに、だ。

そう考えると、森に入った時点で、もう自分は日本ではない別のところにいたのかもしれない。

次に気になるのは、追ってくる兵士とイヴンである。

何も分からなくて、藁にもすがる思いでイヴンについてきてけれど、結局、こんな事態になっている理由が解決したわけじゃない。

第一、イヴンが何者かもわからないままだし、追ってくる兵士たちのことも謎。

何よりも言葉がまったく理解できないせいで、自分がどう扱われているのかもわからないのだ。

「…ロボ、オレ、これからどうなるんだろう」「ただただ不安だった。

イヴンと一緒にいた時は、とにかくどこかに落ち着きたいと思っていた。先の見えない森を出て、ちゃんと他にも人のいる、町や村にたどりつきたい、建物の中で落ち着きたいと、そう思っていた。

でも実際、こうして他の人間にも出会い、質素とはいえきちんとした寝床を用意されているのに、イヴンと森をさまよっていた時よりもずっと不安だった。

オレはいつまで、ここにいればいいんだろう？

この先、自分の家に帰れるのだろうか？

帰れなかった時は、ずっと、この皆で暮らすのか？

どう考えてもぞっとするような疑問だ。

ロボにギョツとしがみついても、思いついた不安に泣きそうになる。

先が見えない。

どうすればいいのか分からない。

くうん、とロボが鳴いた。

やわらかい尻尾が、オレの身体を撫でるように動く。

身体のかなきロボに抱きついてしていると、身体全体で包まれているような気持ちだった。

「ロボ、…あつたかいな」

オレはやさしく撫でるロボの尻尾や、あたたかな温もりに、ホッと肩の力が抜ける。

いろんなことが不安で仕方なかったけど、こうしてロボに包まれていると、この瞬間だけすべてを忘れられる気がする。

オレはロボの温もりに全身でしがみつくようにして抱きつき、鼻先を腹に押しつけて、ほんの少しだけ泣いた。

ロボはただ黙って、オレのそばにいてくれた。

オレはこの温もりが、かけがえのないものだ、そう、実感したのだった。

第19話

オレがこの砦に来て、もう何日になるだろう。一週間は経っていないと思う。

毎日何もすることがないと、日にちの感覚がおかしくなってきた。学校の長期の休暇で、昼夜が逆転するのにちょっと似てる。

正直、オレはもう限界だった。

この砦に居るのは、やはり兵士、つまり軍人のようだった。規律でもなるのか、馬鹿みたいに誰も彼も愛想のない連中である。

オレは最初、少しでも打ち解けようと努力したのだ。

イヴンにオレの世話をたのまれたらしいビガスが、日々食事を運んでくれるので、そのたびに何とかコミュニケーションをとろうと頑張った。でも、ビガスはピクリとも表示をかえず、会話もない。言葉がわからないから当然といえば当然だけど、イヴンとはそれでも何となく意思の疎通ができていたのだ。

このビガスの愛想が悪いだけかと思い、初日にくじけたリベンジとばかりに砦の中をうろついてみても、誰もオレに構おうとはしない。そのうちオレは連中と分かりあうのをあきらめた。

その反動のように、オレは毎晩部屋を訪ねてきてくれるロボにべったりになった。

あれから、ロボは毎日夜になると、窓からオレの部屋を訪ねてくるようになったのだ。

もちろん、ロボとも言葉は通じない。

でも、そんなことが気にならないくらい、ロボは優しいのだ。不安で眠れないオレのそばに、ただずっといてくれる。その大きな身体にしがみついて、温もりに包まれて眠ると、昼間の不安なんか吹き飛んでしまうのだ。

オレは今まで、こんなに優しい生き物があることを知らなかった。ロボと出会えたことは、こちらに来て唯一よかった出来事だ。

今日も無愛想なビガスが夕食を運んできて、オレはひとりでもそもそと食事をした。

食べ終わった食器は、廊下に出しておく、いつの間にか誰かがかたずけてくれている。一度厨房に空いた食器を持っていこうとしたが、途中でビガスに見つかり、よいいなことはするなとばかりに睨まれて、それからこうして廊下に出すことにしたのだ。

「そろそろ、来るかな？」

ロボは毎日オレを訪ねてきてくれるけど、その時間はまちまちだった。

この狭い部屋に、ほとんど引きこもっているような状態のオレにとって、ロボと過ごす時間だけが、唯一の救いである。

だから、夕食が終わるころには、いつも窓を開けて、ロボが現れるのを待つ日々だった。

「…ちよつと、外に出てみようかな」

この部屋は建物の一階にあるので、窓さえ乗り越えればすぐに外に出られる。

オレは名案だと、窓を乗り越えて外に出た。

多分、オレに与えられた部屋は、皆の間取りからすると、ちょうど森に面した端っこの方だと思う。

草地の方向に対しては外壁が築かれていたが、森に対する方は低い壁があるだけだった。

森から伸びた木の枝が生い茂って、その壁もよく見えないような状態である。

ロボはそんな森の方角から、いつもひよっこり姿を現すのだ。

オレは外に出ると、大きく伸びをした。

新鮮な空気を肺いっぱい吸い込むと、濃厚な木々の香りが鼻につく。

暮れたばかりの空の端はまだうっすらと紫色で、反対側の空には細い月が見えてきた。

バカンスで来たのなら、自然の素晴らしさを満喫できたのかもし

れない。

ふと、そんなことを思つて小さく笑つた。

空には相変わらず、たくさん星が瞬いている。そして月。

…そんなところは日本と変わらない。

そう思つて、ふつとため息が漏れた。

ここがどこかは分からないけれど、日本でも、ましてや地球でもないんだらうと、それくらいのことは理解している。

…別の世界。

以前小説で、扉を開ける話を読んだことがある。マンガでも、アニメでも、そんな話はたくさん読んだ。

異世界に行った主人公が、お姫様を助けるために戦つたお話。役目を全うする話。

でも、こんな風に、ただ別の世界にきただけ、という状況なんて見たことがない。

あれをしる、これをしると言われることもなく、むしろ邪魔者あつかいされているのだ。

…オレはここに、何のためにいるんだらうか。

思わず自問してしまう。

「…あれ、何だらう…？」

ふとめぐらせた視線の先に、木々の影からチラチラとオレンジ色の明かりが見えた。

そんなに遠くないところで、何かの明かりが光っているようである。

オレはゆっくりと近づいた。

木立の間から、チラチラと光が瞬く。

…何だらう？

この世界には、電気というものがない。夜になると砦には松明がたかれるのだ。いろんなところの壁に、松明を差し込む取っ手のようなものがあって、そこに火のついた松明を差し込む。

夜は、オレが知ってるよりもずっと暗闇が濃かった。

今見えている明かりも、多分松明の明かりだと思う。オレンジの明かりがチラチラと揺れているから、間違いないだろう。

ただ、どうしてあんな方向から明かりが見えるのか、妙に気になったのだ。

ゆっくり近づいて行くと、遠くに見えた明かりは、意外と近いところにあった。木立の間に見えたから、遠くに見えただけのようだ。やがて、目の前に小さな建物が見えてきた。

「なに、これ」

それはやっぱり石造りで、物置小屋みたいなサイズだった。いや、本当に物置小屋なのかも。

四角い、マッチ箱みたいな形で、少し高い位置に小さな窓がある。その窓から、オレンジの光が漏れてきているようだった。

…誰かいるのかな？

こんな、日も暮れてから人気がない場所に？

ちよつと考えられなかった。

おれはソロソロと小屋に近づいて、中を覗きこもうとした。

でも、窓は随分と高い位置にあって、中を覗くことはできなかった。

でも明らかにそこから光は漏れていたし、中に人がいる気配も感じる。

…どうしよう。

気になってここまで来たけど、誰かがいるなら近づかない方がいいのかもしれない。

どうせまた、いやなものを見たような目で見られるのだ。それなら、近づかない方がいいに決まっている。

おれがそう思って、部屋に戻ろうとした時だった。

急に小屋のドアが開いた。

中から出てきた男と、正面から視線がかちあってしまう。

「……………」

「……………」

お互い無言だった。

見た覚えのない男だ。

オレも殆ど部屋からでないので、すべての人物を知ってるわけではないけれど、少なくとも、この砦にきてから今まで会ったことのない人物である。

それに、いつも見かける連中とも少し違っていた。

ビガスを筆頭に、真面目、実直、冷血を絵にかいたような連中はかりなのに、今日の前にいる男は雰囲気为正反対といってもいいくらいなのだ。

着崩した軍服や、無精ひげ、くわえ煙草。

赤ら顔なのは、酔っているからだろうか。

「あ……」

何かを言おうとしたところ、ニヤリと、男がイヤな感じの笑みを浮かべた。

「***、**、***！」

癪に障る口調で何事かを言って、いきなりオレの腕を掴むと、そのまま強引に小屋の中に引き込んだ。

「ちよっ……！」

突き飛ばす勢いで放り出されて、オレは床にしりもちを着く。

「何するんだよ！」

オレは大きな声を出して、自分を引き込んだ男を睨み上げた。それに男は、人を小馬鹿にしたような、イヤな感じにオレを見る。口元には変わらず見るものを不快にする笑みを浮かべていた。

第20話

しかしオレはすぐに室内の異様な雰囲気気付く。

そこにいたのは目の前の男だけではなく、他にも四人。全員がよく似た雰囲気だった。

つまり、どこか崩れた、普通ではない様子なのだ。服装は皆軍服で、しかしまともに着こなしている者はいない。だらしなく着崩し、品性のカケラも感じられなかった。

何より一番イヤな感じなのは、皆一様に、目つきがおかしいことだ。

焦点があつてないとしてもいづのだろうか、眼球が落ち着きなく揺れているのである。

ふと、テレビで見た薬物中毒者たちの姿を思い出して怖くなった。オレは男たちを刺激しないようにゆっくり室内を見る。

外から見た通りの狭い部屋だ。室内にはほとんど何もなく、ただ剥き出しの石の壁に石の床、テーブルひとつなかった。

男たちは床に直接座り、酒を呑んでいたようだ。床には酒瓶らしきものがたくさん置かれ、酒のあてと思われる乾物、そして何故か乾燥させた草……。

オレはその草と、横に置かれた紙、そして男たちがくわえている煙草を見た。

「……………」

やっぱりと、嫌な予感に背筋が震えた。

日が暮れてから、こんな人気のない場所で集まっているのだ。

どう考えてもまともな理由からではないだろう。何より、男たちの目つきを見れば、彼等がクスリを決めていることは明白だ。

…あの、酒と一緒に置かれた『草』。

テレビのニュースで、大麻草を栽培して捕まったとアナウンサーが告げる画像が唐突に浮かんで消えた。

オレはハッキリと自分の失敗を悟った。

好奇心に駆られてのことこんなところまで出てきたのは間違いだ。あのまま自分に与えられた部屋でロボを待っていればよかったのだ。

「あの…」

オレは、にやにやと笑いながらこちらを見る男たちの様子をつかがいながら、ジリジリと後ろに下がり、この小屋から出ようと図った。

「**、**」

そんなオレの後ろにわざとらしく移動した男が、何かからかうような口調で言う。恐る恐る見上げれば、ぞっとするような視線が向けられていた。

「あ…」

身体がすくむ。

ただでさえ自分よりも大柄な男たちに囲まれて怖いのに、逃げ道をふさがれ、珍しい物でも見るような視線を向けられると、どうすればいいのか分からなかった。

「***」

「**、***」

立ちすくむオレの前で、まったく分からない会話が交わされる。

オレは何とか隙をついてこの場所から逃げ出したいのに、後ろに立った男が、オレの腕を掴んではなしてくれそうになかった。

「***、**」

男はオレの腕をつかんだまま、強引に座らせようとする。他の連中も、男の行動を止めようとはせずに、ニヤニヤといやな笑みを張り付けていた。

「オレ、もう戻る…」

言葉を口にしても、通じないから意味がない。

「**、*****?」

男に押され、オレは『草』の前に座らされた。オレの後ろに立つ

た男は、オレが立ち上がらないように両手を肩に置いて押ししてくる。他の奴が、目の前で紙に『草』を巻き、煙草状になったものを差し出してくる。

オレは勢いよく首を横に振った。

しかし、オレの意思など男たちにとってはどうでもいいようだった。

「***、マーロ***？」

一人の男がオレの名前を呼んだ。オレのことを知っているようだ。この皆では単調な毎日が繰り返されているので、少しでも目新しいことがあればすぐに話題になるのだろう。数日過ごしただけでも、日々の単調さは実感できた。

…でも、だからってクスリなんかやっていいはずがない！

オレは逃げ道を探した。

だが、この狭い小屋の出入り口はさつき入ってきたドア一カ所で、窓も高い位置にある。ドアの前には男がいるし、何より両肩に置かれた手にがっしりと捕まれ、なかなか振りほどけそうにない。

そんなオレに、さつき煙草を差し出してきた男が、今度はお酒の入ったグラスを差し出してきた。そして目の前でお酒に何かの液体を混ぜる。

オレは突き付けられるグラスに、首を横に振って拒否を示す。

「***、マーロ」

片頬を歪めるようにして厭らしい笑みを浮かべた男は強引にグラスを口に当ててくる。オレはきつく唇を閉じて、頑なに拒んだ。

ただでさえお酒は飲めないのに、混ぜ物をされたものをどうして飲めるだろう。

「***！」

男が強い口調で言い、グラスを押し付けてくるのを、他の男たちは酒を飲みながらニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべて見ている。

…誰も助けてはくれない。

オレは押し付けられるグラスを避けつつ、それでも何とか逃げ出

そうともがいてみた。後ろからオレの肩をおさえている男も、グラスを押し付けてくる男の行動を助長しているようだ。

「やめろ！」

オレは我慢できなくなつて、力いっぱい抑えている男を押しつけた。

不意を突かれたのか、何とか拘束から逃れることができた。

オレはドアの近くにいる男の脇をすり抜けて、そのまま外に出ようと走る。でも、ドアに手をかけたところで、強引に後ろに引き戻された。

「…っ！」

肩に手をかけられ、力任せに引つ張られたオレは、勢いのまま床に転がった。

グラスを持った男が倒れたオレに馬乗りになつて、再び酒を押し付けてくる。さっきまで傍観していた他の連中も、何故か一緒になつてオレを抑えつけてきた。

「やだ！ 誰か…誰か助けて！」

何とか逃げ出そうともがいていると、顎を掴まれて無理やり酒を注ぎこまれた。

「んんっ！」

口からあふれるほど注がれ、吐き出そうとすると鼻をつままれた。身体のうちらこちらを抑えられ、身動き一つできない。

顔も、腹も、手足も、体中が痛かった。

さらに、次から次へと注がれる酒をどうしようもなく、飲み干すしかなくなる。

もう、何が何だかわからない。

目の前がクラクラした。

…苦しい。

息ができない。

身体が痛い。

ぼやけた視界に人影が見える。

自分の身体が引きずられるのを感じるけど、何だかもつそのすべ
てがぼんやりとして遠い。

半透明な幕が自分を周囲の間に張られていて、幕の向こうのこと
がよくわからない。

クスリのせいだ。

……クスリ？

グラグラ身体が揺れている。

腕や足が持ち上げられている。

思考が散漫で、何も考えられない。

何だろっ、何が起きているんだろっ。

…誰か助けて。

父さん、母さん、兄さん…。

懐かしい面影が脳裏に浮かぶ。

もう何日会ってないだろっ。絶対心配してるに決まってる。

「…っ、…」

何だか気持ち悪い物が身体の上を這っている。

いやだ。

オレは何とか逃れようとしたけれど、自分のものじゃないみたい
に身体が言うことをきかない。

「や、…だ…」

重いものが押し掛かってくる。

オレは必死に身体を動かそうとした。

「…？」

不意に、圧迫感がなくなった。

オレはよく見えない目をこらして、なんとか周囲の様子を見よう
と頑張る。だが、ぼやけた視界にはハッキリと見えない。

バタバタと慌ただしい物音と悲鳴。

どなり声。

…なに？

断末魔のような叫び声が聞こえた。

何が起こっているのか、全く分からない。何とか腕に力を入れて、身体の向きを変えてみる。

でも、なかなか言うことを聞かないのだ。

まるで高熱が出て寝込んでいる時のような、ふわふわした浮遊感と、力が入らない脱力感がある。

低いうなり声が聞こえた。

あと、鋭い鳴き声も。

尾を引く断末魔の悲鳴。

……ロボ？

金色が見えた。

明かりを受けて、キラキラと光ってるように見える。

やがて、何の音も聞こえなくなって、オレはだんだんと意識が朦朧としてきた。

閉じた瞼を、軽く押される動きにうつすらと目を開く。

くうん、と鳴き声が耳に届いた。

「……………」

ロボ、と呼ばうとしたが声は出ない。

それでも何とかロボに伝えようとしたが、唇が震えただけだった。頬を舌で舐められる感触。

唇の端をロボの舌が舐めた時、ピリと鈍い痛みが走る。

…怪我。

男に殴られた時、口の中と唇を切ったことを思い出す。

大丈夫だよ、とロボに声をかけたいのに、オレの意識はどんどんあやふやなものになってきた。

その時、きやうん、と悲鳴のような声が出た。

「……………」

ロボ、と声をかけたいのに、もう意識を保っていることはできなかつた。

頭の中がぼわん、として、急速に意識が遠くなったのだ。

ロボが、うなり声をあげている。

苦しそうな息使いも。

…ロボ。

声に出さずに名前を呼んで、オレの意識を持ったのはそこまでだった。

あとはもう、ただ、暗闇の中　。

第21話

小さいころから、オレは家族みんなに溺愛されて育った。

何しろ、十五年前にオレが生まれた時、父さんは四十歳、一番上の蘇芳兄さんは十七歳。瑠璃姉さんも十四歳である。

十分に分別のつく年齢だった。

思春期にありがちな、親の再婚に反対するような反応はなくて、自分たちとそう年齢も変わらない新しい母親のことも好意的に受け入れていたのだ。

そこに降ってわいた新しい異母弟の存在は、家族にとってただただ溺愛する存在だったのだろう。

オレは生まれてからずっと、よく家族のみんなの抱き枕だった。もの心がつく頃には、家族の誰かのベッドで眠るのが当然のようになっていた。

自分の部屋にもベッドはあったが、誰かしら一緒に寝ようと誘ってくるのだ。中学に入ったところからは、その頻度も少なくなってきたけれど、実は、高校生になった今も時々兄に呼ばれて抱き枕になつていたりする。

だから、自分が誰かに抱きしめられて眠るのも、そう不思議な話ではないのだ。

オレの意識はまどろみの中、抱きしめる胸に鼻先を押し付けた。

……………？

何となく、違和感を覚える。

オレ、昨日は誰と眠ったっけ？

蘇芳兄さん？

琥珀兄さん？

モエ兄……ではないな。

「……………って、んじゃ誰だよ」

寝起きにつぶやいた言葉は、ちゃんとした発音にはなっていないか

った。しゃべったつもりが、ただモゴモゴ言っただけだ。

オレは目を閉じたまま、手探りで自分を抱きしめる人物に触れた。抱きとめる広い胸板。たくましい筋肉のついた腕。

……??

オレが起きたことに気付いたのか、髪を撫でられた。

……??

オレはしよぼしよぼする目を瞬いて、何とか目を開けた。

一番最初に見えたのは、キラキラだった。

キラキラ……金色？

「なに、これ？」

オレは金色のキラキラをむんずとつかんでひっぱった。

「***」

聞き覚えのない言葉に、オレはぎょつとして上を見る。

「……！」

オレはそこにいた人物を見て、馬鹿みたいに口をポカンと開けてしまった。

「………だれ？」

茫然として問いかける。

そこにいたのは、見たこともないきらびやかな男だった。

とにかく目につくのは、流れるような黄金色の髪だ。そして、褐色の肌。

じつとオレを見つめる瞳は髪に負けない黄金色で、視線が合うとすぐく落ち着かないような気分になった。

堀の深い顔立ちは少し癖があるけれど、かなりの男前だ。年は二十代後半くらいだろうか。

彼はポカンとして見つめるオレに、うっとりと思われるような笑みを浮かべた。

「マシロ」

低くて、すごく響く声だった。

「え……？」

「***、マシロ」

彼はとても優しい表情で笑みを浮かべ、正確にオレの名前を呼んだ。

「は…？」

今の自分の状況がまったくわからなかった。どうして見知らぬ男前に抱き枕状態で眠ってたんだろう？

それに、ここってどこ？

オレは眠る前の最後の記憶を思い出してみただけど、はっきりしない。

確か…。

夕食を食べて、ロボが来るのを待ってて、…そして。

「あ」

急に思い出した。

裏の小屋で、ガラの悪い連中からまれたのだ。変な酒と薬を飲まされて…、そのあとのことがよく思い出せなかった。

あの時の恐怖が急に蘇ってきて、オレは身体が震えた。身体を動かすと、昨日殴られたところが痛む。

…あの後、どうなったんだろう？

オレは何も思い出せない自分が怖くなる。何をされたのか。

ぞつと背筋に悪寒が走った。

「マシロ、***、マシロ」

震えるオレを、彼は優しく抱きよせる。

やわらかい筋肉のついた腕に、厚い胸板。

大きな腕に抱きこまれ、その温かさに包まれると、やがて震えが収まってくる。

彼は、何度も同じ言葉を繰り返しながら、オレの名前を呼んだ。

「…のせ？ ふれおく、ペ…って、なに？」

オレは彼の繰り返す言葉を言ってみた。

オレを安心させようと言ってくれていたから、『大丈夫』ってと

ころかな？

そうつと彼を見上げると、黄金色の瞳がオレをじっと見つめていた。

：なんか、兄さんたちみたい。

優しい眼差しは、どこか兄たちを思い出させる。

「マシロ、大丈夫」

彼はそつとオレの髪を撫で、低い、よく響く美声で繰り返す。

：ありがと、もう大丈夫。あ、えーと、『大丈夫』」

オレは同じ言葉を返した。

翻訳がオレの思ってた通りなら、ちゃんと通じるはずだ。

「それより、あなたは誰ですか？　なんでオレの名前知ってるの？　オレは改めて問いかけた。

でも、：言葉は通じないんだよな。

しかし彼はまるでオレの言葉がわかっているかのように言った。

「***、ロボ」

自分を指さして、にっこりと笑う。

「ロボ、ロボ、：ロボ」

何度も繰り返す意味が、最初は分からなかった。

「そういえば、ロボってどこいったんだ？」

何となく、最後の記憶のロボの姿を見た気がする。

だとすると、部屋にいないオレを探してロボが助けてくれたのだろうか。

「たなた、ロボの……飼い主？」

ロボが飼い狼じゃないかって、思ったことがあった。野生の狼にしては毛皮が完璧にケアされてるし、人懐こすぎる。

それに、この人ならロボの飼い主と言われても納得できた。まるでロボのような、黄金の髪と瞳。スツと通った鼻筋、堀深く端正な容貌。体つきだって、こうしてオレをすっぱり抱きしめてしまえる大きさで、しなやかな筋肉に覆われた肉体をしている。

「マシロ」

彼はにこにここと笑みを浮かべたまま、ペロリとオレの頬を舐めた。
「うわ！」

オレは驚いて身体をのけぞらせる。

「痛ッ！」

昨夜蹴られた腹が痛んで、身体が硬直した。

よく見れば、腕にも腹にも足にも、包帯が巻かれている。

「…なんで裸？」

オレはのけぞった格好のまま混乱する。

気づけば、目の前の彼も服を着ていない。一応下着は身につけているけど、ほとんど裸で抱き合って眠るってのはどうだろう。

それに、さっきの頬を舐めたのは何？

「マシロ、…ロボ、**、ロボ」

彼は自分を指差して、ロボの名前を繰り返す。

オレが首をかしげていると、彼は再びオレの頬をペロリと舐めた。

「うわ！」

「ロボ、マシロ、ロボ」

何度も同じことを繰り返すのを見てみると、何となく彼が言いたいことが分かってしまった。

…分かったけど。

「…もしかして、自分がロボだって、言ってる？」

第22話

確かに、見事な黄金色の髪も、瞳も、ロボとまったく同じ色合いだけど、とても突拍子もないことである。

オレの言葉が分かったのか、そうだとでも言うように彼はうんうんと頷く。

その様子は、確かにロボによく似てる。ロボとは最近、ずっと夜と一緒に過ごしたけど、オレが一方的に話す言葉がわかってるんじゃないかというくらい、タイミング良く相槌をうつてくれたのだ。

今から考えると、相槌をうつ狼っていうのも変だけど。

「…でも、ここが異世界だったら、人になれる狼がいるのかもかもしれないし…」

よくファンタジーには獣人とかが出てくる。そう考えると、彼のいうことも、絶対ないとは言いつれないのかも。

…日本じゃ絶対ないけどさ。

「ロボ？」

オレが今一つ納得がいかないまま呼び掛けると、彼は満足そうな表情になった。

「マシロ、*****、**」

何を言ってるかは分からなかったけど、でも、何となくこの人がロボだっているのは、そこまで違和感のあることではない、…ような気がする。

理性は納得いかない、とっているけど、感覚的には、彼の言葉を信じていた。

なぜなら、今日目覚めた時の感じが、ここ数日間と同じだったからだ。

ずっと夜はロボがオレのベッドで泊って行ってきて、一つの布団と一緒に寝ていた。オレの方が、ロボの腹にしっかりと顔を押し付けるようにして眠っていたのだ。さっき起きた時もそうだった。

彼の胸にしがみついていたのだ。でも、全然いやとかそういうことはなく、むしろ安心できたくらいである。

オレは自分の感覚を、とりあえず信じることにした。

それに、オレがロボのことをロボと呼んでいると知ってるのは、それこそロボだけだ。

オレの名前も、『マーロ』ではなく『マシロ』と呼んだ。正式に名乗ったのはイヴンとロボの二人だけだから、彼の主張とも一致する。

本当に狼が人間になれるのかと、信じられない気持もあるけど、昨夜ロボが助けにきてくれた記憶がうつすらとあるし、目が覚めてオレのそばにいたのも人間の『ロボ』だ。

今はもう、ロボの言うことを信じていよう。

どうせ、彼に嘘をつかれていたとしても、オレには他に行くところはないのだ。

ロボのことは追々考えることにして、それよりも、周囲を見回した。

いったいここはどこなのかと思ったのだ。

ゆっくり室内を見る。

また部屋が変わっていた。

ここ数日を過ごしたあの狭い部屋ではない。

一言でこの部屋を言うなら、とにかく豪華な部屋である。

高い天井、やわらかなベッド。窓から差し込む朝日は、薄いレースのカーテン越しに、やわらかな光を室内に届けている。

壁にはタペストリー、暖炉、床には絨毯。まるでどこかの別荘のような内装だった。

「ロボ、…ここどこ？」

オレはロボを振り向いた。

ベッドの上で、オレとロボは向き合っている。はたから見ればパントリーで男二人が向き合ってるなんて、変な姿だろう。

オレはロボを見て、つい、その容姿に見とれてしまった。

ロボはベッドに横になったまま、片肘をついて、上半身だけを起こしている。そんな何気ない姿が、何とも言えない色っぽさを醸し出している。

気だるそうに寝そべっている、ただそれだけのことがすばらしく絵になっているのだ。

…うわ。

オレは頬が熱くなった。

今さらだけど、あの腕の中に一晩いたんだと思って、恥ずかしくなったのだ。

…なんで？

誰かの抱き枕になるのは慣れたことなのに、どうしてこんな気持ちになるんだろう。女の人ならまったく違うと思うけど、ロボはオレと同じ男だ。男二人が同じベッドで眠っただけなのに。

「マシロ…？」

にこ、とロボが笑う。

「……………」

オレは自分の頬がいつそう熱くなるのを感じた。
なんだろ、これ。

「…ロボがカツコよすぎるのが悪いんだ」
視線を外してうつむき、小さくつぶやくと、ロボの手がそっと頬に触れた。

「マシロ、……………」

ロボがオレの瞳を覗きこむようにして、顔を近づけ、低い、甘い声でささやくように言った。

「…意味わかんないし」

だからなんでオレの頬、熱くなるんだ。

オレが訳も分からず赤面していると、部屋の外から声が掛けられた。

「……………」

ロボがその声に、返事をする。

オレはまたもやびっくりした。
さつきまで自分に向かって語りかけていた口調と、まったくちがったからだ。

背筋がソワソワするような、低く、甘い口調だったのに、今はどこか偉そうな、そう、威厳が感じられるような口調だった。

オレは思わずロボを見る。

視線に気づいたロボは、瞳をすぐめるようにして優しい笑みを浮かべる。

…だからその顔は反則だって。

オレはまたもや頬を熱くしてしまい、自分の反応に戸惑って視線を逸らす。

するとドアが開いて、先ほど外から声をかけたと思われる人物が入ってきた。

「****、**」

彼は頭を下げながら何かを言って、ゆっくり頭を上げる。
すごく姿勢のいい人だった。

長身で、短い赤毛。ロボと同じ褐色の肌に、理知的な顔立ち。

ロボより少し年上なのかな？

理路整然とした思考をしそうな、落ち着いた雰囲気の人だ。

服装は、…なんだろう。

そう、まるで中世の時代のような服装だ。

刺繍の施された落ち着いた緑を基調とした上着、ズボン、長めのブーツのような靴。腰に剣を佩いている。よく映画で見たような服装だ。

でも、昨日までいた皆にも、時代が違うような軍服を着た兵士がたくさんいたから、こういう格好が普通の世界なのかもしれない。

「****、****」

ロボが声をかけると、赤毛の男はゆっくり近づいてきた。

その視線がオレの方を向いている。

「わー！」

急にオレは自分がパンツ一丁だったことを思い出した。

慌てて掛け布団を引っ張って身体に巻きつける。するとロボの身体が丸見えになってしまったが、オレと違って整ってるから、見られて恥ずかしいものじゃないだろうと、我慢してもらおうことにする。

「マシロ、***、カルロス」

ロボが赤毛の男を指さして言った。

ゆっくりと発音してくれたので、一度で聞き取ることができた。

「かるるす…?」

それでも、本場の発音つてもものには程遠くて、モロ日本語発音になっちゃった。

大丈夫かな、とロボを見ると、またさっきのにつこり笑顔を浮かべて、よくできました、とでも言うようにポンポンとオレの頭を撫でる。

「カルロス、***、マシロ。***、**」

ロボが今度はカルロスにオレのことを紹介してるみたいだ。

カルロスはオレに向き直ると、きつちりと腰から曲げて頭を下げた。

「***カルロス・ハ***・***ラ、***」

多分フルネームを名乗ってくれたんだろうけど、ゆっくりと発音してくれないと聞き取れない。

とりあえず、カルロスってことは分かったから、詳しいことはもう少し言葉の勉強をしてから聞くことにしようとする。

「オレは真白。大月真白。真白って呼んでくれたらいいよ。でも、呼びにくかったらマーロでもいいし」

笑いながら言うと、カルロスはわずかに頷く。

「え、うわ!」

急に、ロボが後ろからオレを引っ張って、後ろから抱っこされた。

「ロボ?」

オレは名前を呼んでみたけど、ロボはオレを離す様子がない。

「カルロス、***、***」

ロボが何かをカルロスに告げた。

何となく、命令してらって感じの口調だ。それにカルロスの態度を見てみると、ロボの部下なのかなって感じがする。

∴ロボって、実は偉い人？

第23話

「ロボ？」

オレは後ろを振り向いて、ロボを見上げた。

カルロスは軽く頭を下げ、そのまま部屋を出て行く。

「マシロ、*****」

ロボはまた何かを言って、オレを抱っこしたまま立ち上がった。

「ええ？」

ひょいと、ロボはオレの体重なんかまったく気にならない様子で、オレをコアラ抱っこして歩く。パンツ一丁っていうのは、まったく気にしてないようだった。

ロボはカルロスが入ってきたドアとは違う、反対側の壁にあるドアを開けた。

「うわ」

そこは、ウォークインクローゼットだった。

色んな服が、所狭しと置いてある。

カルロスはその中から、無造作に数着の服を取り出し、再びベッドに戻る。

…別にオレを抱っこしていく必要ってないんじゃないけど。

ロボはオレをベッドに座らせると、とってきた服を着せてくれた。自分で着れると言ってみただけ、言葉が通じないのもあって、押し切られてしまったのだ。

ロボが選んでくれた服は、昨日までの皆で用意されたものとまったく違った。

皆で用意された服は、基本サイズが合ってなくて、無理やりベルトで止めて着ていた。多分、あそこには兵士しかないから、オレのような小柄な体系に会う服がなかったんだろう。

でも、今ロボが着せてくれた服は、オレでも着れるものだった。その上、シャツの肌触りが全く違う。つるつるしていて、すごく

柔らかい。あきらかに、上等なものだと分かった。

ロボは自分も手早く着替えると、再びオレをひょいとコアラ抱っこで抱え上げる。

オレはもう、なにも言わなかった。

多分、ロボはオレが怪我をしているから、気遣ってくれているんだと思うことにしたのだ。

ロボはオレを連れて部屋を出た。

外の廊下も、皆とはまったく違う造りのようだ。

何より、石造りの建物ではない。

木造で壁紙もきちんと貼られた、オレがよく知ってる建築だ。雰囲気は本当に軽井沢かどつかの豪華な別荘という感じである。

ロボは絨毯の敷かれた廊下を歩き、突き当たりの部屋に入った。

そこはダイニングルームのようだ。

中央に大きなテーブルがあつて、テーブルクロス、中央には花瓶に花。テーブルの上には朝食の用意がされていた。

ロボはオレを抱っこしたままテーブルに着き、自分の椅子のすぐ横にオレのための椅子を移動して、オレをそこに下ろしてくれる。

「マシロ、***、***」

「…食べていいってこと？」

オレはロボが促すように声をかけてくるのに、食事を指さしてみた。

にっこりとロボが笑ってくれたので、オレは遠慮なく食事をいただくことにする。

フォークを手にとつて、どれから食べようかなと料理を見る。

テーブルの上にあったのは、素朴な料理だ。パンと、果物、サラダ。ハムのようなもの、卵焼き。

オレは遠慮せずに頂くことにした。

「おいしい！」

卵とパン、果物。

普通の、本当に普通の朝食だった。

でもそれが嬉しい。

こちらに来た時は、イヴンからもらった携帯食料と水だったし、皆で出たのは果物と硬いパンと水だった。

「でも、…いたた」

大きく口を開けると、昨日切った怪我が痛んだ。口の中と、唇の端だ。

唇の端は、大口を開けすぎてまた切れてしまったかもしれない。

「マシロ、***？」

料理をぱくつくオレを、ロボは何だかほほえましそうに見て声をかけてくる。

多分、おいしいかとかきいてるんだろう。

「おいしいよ！」「おいし！」

ロボの言葉をまねて言ってみた。

すると、ロボはちよつと驚いた顔をしたけど、すぐに嬉しそうな顔をする。

「おいしい？」「おうす？」

ロボもオレの言葉をまねて言った。

でも、発音が難しいのか、ちゃんとした言葉にはなっていない。

「ちがうって。お・い・し・い。おいしいだよ」

「おいすうい」

オレの言葉を繰り返すように、ロボが言う。

「そう。この国ではおいしって、『りこ』って言うんだ。一言だから簡単！」

ロボが日本語を覚えようとしてくれていることが嬉しくて、オレは満面の笑みを浮かべた。

オレは食事をしながら、色んな物の名前を聞いてみることにした。テーブルの上に乗ってるものを指差して、まずは日本語で言うってみる。そしてロボに返事を求めるように視線を向けると、すぐにオレが何をしたいのかが分かったようで、単語を教えてくれた。

言葉自体は、すぐくゆっくり発音してくれるから、何とか聞き取

れるけど、問題はこれだけの単語を覚えられるかってことだと思う。そうして食事しながら言葉を教えてもらっていると、部屋の外から荒い足音が聞こえてきて。

「……?」

何だろうと思って視線を向けると、すごく乱暴にドアが開く。

「あ!」

入ってきた人物に、オレは大きな声を上げてしまった。

向こうも、どうやらオレがロボと一緒にいることに気付いたようで、驚いたように瞳を見開いている。

「マーロ…?」

イヴンが、いぶかしげにオレの名を呼んだ。

そう、そこには、数日前にオレを助けてくれたイヴンがいたのだ。

「***、***!」

イヴンは早口に怒鳴るような口調で言って、ロボに詰め寄る。

ロボはそんなイヴンとは違い、とても落ち着いた様子でにやにや笑ったりしていた。

「……どうということだろう?」

オレはどうしてここでイヴンがでてくるのか、まったく分からなかった。

イヴンは何か用事があったから、オレを皆に置いて出かけたんじゃないかなかったんだろうか?

「……っていつか、ロボと知り合い?」

オレは急なことにすごくびびりしてしまった。

目の前では、イヴンは一方的にロボに文句を言ってるようだった。オレにはすごく優しい表情をしてくれていたのに、ロボには何か乱暴な口調を使っている。

ロボはロボで、イヴンの文句なんか、簡単に聞き流しているような感じだ。

「え、ロボ!」

急に、ロボの様子がおかしくなった。

さっきまではイヴンの言葉なんかどこ吹く風だったのに、いきなり険しい表情をしたかと思うと、前かがみに倒れこんでしまったのだ。

「ロボ、どうしたの？　ロボ！」

そのままロボは椅子に座ることもできない様子で、床に倒れこんでしまった。

イヴンもオレも訳が分からなくて、ロボの横にしゃがみこむ。

第24話

「*****！」

大きな声でイヴンがドアの外に怒鳴る。

バタバタと大きな足音がして、さっきのカルロスが駆けつけてきた。

「*****！」

イヴンがカルロスに怒鳴りつけるように言うと、カルロスははじかれたように踵を返し走って行った。

「ロボ、大丈夫？ 『だいじょぶ』？」

発音に自身はなかったけど、以前ロボが教えてくれた言葉で声をかけた。

「ロボ、……………え…？」

その時、目の前で信じられないことが起こった。

うずくまって、小さくなって、苦しんでいるロボの輪郭が、ゆっくりと変わって言ったのだ。

シャツの下で、ロボの身体の形が変わっていくのが分かる。
金色の毛皮。

そう、ロボは目の前で、人間から狼になってしまったのだ。

「…ロボ…」

本当だったんだ、というのがまず最初に頭に浮かんだ言葉だった。あまりにもびっくりして、感情がついて行ってない感じである。

ただ、ロボは本当にロボだったんだとぼんやりと思った。

「*****！」

イヴンが大声を出すと、ロボはシャツのなかでじたばたと動いていた。

「あ、服が」

邪魔なんだな、とイヴンも気付いたのだろう。シャツのボタンとズボンのボタンを外した。

ぶるぶると体を震わせて、金色の狼が伸びをする。

「ロボ……」

オレが名前を呼ぶと、ロボはゆっくり振り向いた。

そしてゆっくり近づいて、ペロリとオレの頬を舐める。

「わ、ちよつと、……………え、ちよつと！」

いきなりロボはオレに押し掛かってきた。

大きな身体を支えきれはすもなく、オレはロボに押し倒されるままに床に背中から転がる。

「つわ、こら！」

ロボは執拗に、オレの頬を舐めた。そのうちロボの舌は唇に移動する。

「ちよつと、そこはまだ傷が痛いって！」

オレはロボの顔を掴んではがそうとするけど、力はロボの方が強い。

そのうち、ロボの舌は唇を舐め、とうとう口の中にまで入ってきた。

「んん！ ……やあん！」

オレはもう訳が分からない。

なにこれ！

なにこれ！

「*****！」

いきなり怒鳴り声が聞こえたかと思ったら、イヴンがロボを後ろから羽交い絞めにしてひきはがしてくれていた。

オレは茫然として、床に転がったままロボを見る。

どうしていきなりロボに襲われるのか、まったく意味が分からない。

あんなに、オレに優しくしてくれていたのに……。

でも、茫然とするオレの前で、また信じられない変化が起こる。

「……………なに？」

イヴンに抑えつけられたロボが、また苦しみだしたのだ。

きゃうん、と苦しげにロボが鳴いた。

そうして今度は、ロボは狼から人間に変化した。

驚いたイヴンが腕を外すと、ロボはそのまま床に片膝をついた。

「……………ロボ？」

恐る恐る呼び掛けてみると、ロボは苦しげな表情のままゆっくりと顔を上げてオレを見た。

「……………」

思わず息をのむ。

何とも言えない眼差しと表情に、オレは魅入られたように動くことを忘れた。

「マシロ……………」

低い、甘い声がオレを呼ぶ。

ロボはゆっくりと腕を伸ばすと、そのままオレを引き寄せた。

オレはロボの広い胸に抱きこまれる。

今の変化のせいだろうか、汗でわずかに湿った肌からは、ロボの体臭が香った。

どうしてだろう、何だかクラクラするような、いいにおいだった。

「マシロ……………ミ・テソロ」

ロボはかみしめるような口調で言った。

「ミ・テソロ」

再び、耳元で低く囁くように。

その言葉の意味は分からなかったけど、オレは抱きしめられる腕の中で、身動き一つできないでいる。

「マシロ……………ミ・テソロ」

ロボは甘く囁いて、そっとオレの髪を梳いた。

「……………ロボ？」

オレはまったく今の状況が理解できないまま、問いかけるようにロボを見上げた。

思ったよりも、ずっと近くにロボの瞳があった。

金色の、黄金色の瞳だ。

こんな綺麗な瞳の色は、見たことがなかった。

外国の人くらい日本にいても何人も見たが、こんなに見事な金髪と、そしてこの、吸い込まれてしまいそうな金色の瞳は、きつと、ロボがけが特別に持つ宝石なんだと思う。

「マシロ…」

低い、甘い声が名前を呼んで、気付けば、そつと唇が重なっていた。

「…っ！」

驚愕で口を開ければ、口の中まで舐められた。

今まで家族以外とキスをしたことなんてない。家族とも、もの心がつくかつかないかの小さい頃の話だ。

だからこれは、オレのファーストキス…。

…さつき、狼のロボにも口の中を舐められた。

どつちにしても、オレのファーストキスの相手はロボ。

「あ…」

唇が離された時、文句を言おうとした唇は震えて、結局何も言えずに終わる。

「マシロ、…ミ・テソロ」

繰り返されるロボの甘い声。

オレはロボに抱きしめられながら、一体これからどうなってしまうのだろうか、漠然と思ったのだった。

第1部完

第25話

初めて両親に動物園に連れて行ってもらったのは、まだ物心つく前のことらしい。

その時のことは覚えてないけど、アルバムにもビデオにも残っている。

きちんとオレの記憶にあるのは、多分幼稚園に入っただけくらいからだろうか。

オレの一番のお気に入り、狼だった。

母さんがよく読んでくれた「シートン動物記」の「狼王ロボ」の話が大好きだったからだ。

素敵だよ、純愛だよ、母があまりにも褒めるので、オレも何となく、狼って素敵なんだなと思ってた。

二人で動物園の狼に「ロボ」という名前をつけて、休みの度に行きに行ったら、ロボはオレと母さんの近くに寄ってきてくれるようになった。それが嬉しくて、オレは本当によく動物園に通いつめたものである。

その習慣は、父さんが新しい家を買って引っ越すまで続いた。

そのころから、オレは犬を飼いたいと思いはじめたのだ。きっかけがロボのことがあったからというのは明白である。さすがに狼を飼うことはできないから、狼のような大型犬を飼いたいと思うようになった。

その夢が叶ったのはオレが中学に入学する年で、引っ越してから随分たったし、大型犬どころかパピヨンとミニチュアダックスという小型犬だったけど、今となっては二匹とも大切なオレの家族だ。けどそれとは別に、オレの中には「狼」という生き物に対してやはり特別な思い入れがあったし、実際、動物園の「ロボ」はいつでも優しい眼差しでオレを見つめてくれていた。思いこみと言われればそれまでだが、近づくといつも側に来てくれて、ゆるく尻尾を

振ってくれたことが思い出される。

だから、だろうか。

オレにとつて「狼」という生き物は本当に特別で、かわいい生き物だったのだ。

だから、いきなり見知らぬ場所にきて、兵士たちに襲いかかるロボの恐ろしい姿を見ても、その後に尻尾を振ってかわいらしい鳴き声を聞かされると、どうしようもなく愛おしくなってしまう。

ロボは、出会ったときから特別だった。
とにかく、頭がいい。

うちの愛犬たちも、オレの言うことをよく理解するとしても賢い子たちだったけど、ロボはもう、比べものにならないくらい頭が良かった。

オレがこの見知らぬ世界にきてから、ロボはずっとそばにいてくれた。

イヴンがオレを砦に残し旅立った後も、夜になると訪ねてきて、一緒にベッドで眠ってくれた。

ロボは何か言葉を話せるわけじゃなかったけど、取り留めもなく語るオレの言葉に黙って耳を傾けて、その暖かい毛並みで包んでくれた。

自分より大きな狼を、不思議と怖いとは思わなかった。

それどころか、綺麗な金色の毛に頬をすり付けて、暖かい体に抱きついて眠ると、ここがまったく見知らぬ場所だという恐怖も不安も、つかの間忘れてぐっすりと安眠できたのだ。

ロボの毛並みはいつも柔らかく清潔で、太陽のような臭いがした。とても野生の狼とは思えなかったけれど、それを不思議だと気づいたのは、ほんのつい最近だ。

いろんなことに疑問を覚えるよりもまず、オレは自分がどこにいて、これからどうなるかということに頭がいっぱいで、そばにいてくれるロボの温もりに縋っているばかりだった。

だから、その当のロボに対する疑問を深く追求しようとは思わな

かったのかもしれない。

オレは多分、今自分の置かれている状況から現実逃避したかったんだと思う。

いや、信じられなかった、というべきだろうか。

たとえば、ここが日本どころか地球でもなく、見知らぬ異世界であることとか、どれだけ探しても、歩いても、自分の家に戻れることがないだとか。

頭のどこかではそうだろうと認めていても、感情的に納得できなかったのだ。したくなかった、という方が正しいかもしれないけれど。

でも、それでもオレの目の前で、今まで「狼」だったロボが人間の姿に変わったことは衝撃的だった。

だってそんなこと、アニメや小説の中だけにあることだと思っただけからだ。

狼男の映画もみたことがあるけれど、こんなにリアルに変身する姿を見ると、自分が本当に異世界に来てしまったんだと、イヤでも実感した。

今までの出来事を思い返して、オレはふう、とため息をついた。

窓の外には、遠く広く海が広がっている。

それはもう、真っ青な青空に、真っ青な海、白い雲、地平線まで見えて、まるで旅行会社の南国パンフレットのようだ。

岩で襲われてロボに助け出された後、オレはそのままロボとイヴンと一緒に旅立つことになった。

オレはもう、あの連中のいる砦に戻りたいとも思わなかったし、ロボもオレを離そうとはしなかった。

言葉が通じないわりには、それなりに意志の疎通ができて、オレは二人に着いていくことに決めたのだ。

ロボが人間になったことには驚いたけど、しばらくするとまた狼の姿に戻って、綺麗な金色の瞳でじっとオレを見つめてきた。

イヴンも優しい笑顔を浮かべて、身振り手振りでオレに着いてく

るように伝えてくる。

何よりも、オレはもうロボのことが大好きになっていたから、ロボと一緒にいくことにためらいはなかった。

それからは、イヴンと狼の姿のロボとで、砦から離れまた森を行く旅の始まりである。

携帯食料と、ロボがしとめてくる動物や、川で穫れる魚。

まさにサバイバル。

正直、イヴンの前に乗せてもらったとはいえ、馬での移動はかなり辛かった。

歩くよりは全然楽でも、いろんなところの筋肉が痛くなるし、特にお尻が痛い。

それでも、イヴンがオレのことを気遣ってくれていることもわかったし、ロボがずっと付き添ってくれて、夜はオレの抱き枕になってくれたから、何とか我慢できた。

道中、イヴンが色々と話しかけてくれたので、少し言葉を覚えることもでき、簡単なコミュニケーションをとれるようになった。

そうして進むこと一週間。

ずっと森の中を走り続けて、でもある時、急に視界が開けたのだ。そこに広がっていたのは、すごく綺麗な海岸線だった。

オレたちの立っている場所は海よりもずっと高い位置で、海岸線を見下ろせる場所である。眼下に広がる景色は壮観で、オレはしばらくその景観の美しさに見とれた。

海岸線の高台には石造りの城が建っていて、オレが今いるのがその城の中である。

街に入ったオレたちは、まっすぐにこの城に向かった。

イヴンを先頭に、ロボは狼の姿のまま、オレはその後に続いて歩く。

城の裏門のようなところに回ったイヴンは、門番の兵士に近づき何事か話しかけた。すると、かしこまって姿勢を正した兵士は、黙ってオレたちを城内に入れてくれた。

…イヴンって、何者なんだろう？

改めて、オレは自分が一緒にいるのがどういった存在なのか疑問がわいた。

最初にオレが預けられた砦にしてみても、イヴンに対する兵士たちの態度はとて丁寧だったし、オレを預ける時も、簡単に要求が通っていた。

イヴンは、すごく偉い人なんだろうか？

そうとしか思えないような周囲の対応である。

その後のことも、信じられないようなこと連続だ。

まず、すごく豪華なお城に圧倒された。

海沿いにあるからだろうが、雰囲気は南国のリゾート地って感じだ。

オレのために用意された部屋もすごく豪華だった。食事も高級ホテル並だし、きちんとお湯のお風呂もある。

着替えとかアメニティ関係も至れり尽くせりで、これまでの生活の中で、一番豪華な者になっていると思う。

父さんは結構有名な作家で、家族で豪華リゾートに行ったこともあったけど、ここは桁違いにもっと豪華だ。

何が何だか分からない間に、オレはロボたちとこの城に滞在することになったのである。

それで改めて分かったのは、ロボたちが本当にすごく『偉い人』なんだってこと。

このお城には、たくさん働いている人たちがいたけど、みんながみんな、すごくロボたちに敬意を払っているのだ。

一緒にいるオレのことをどう思っているのかは分からなかったけど、すごく丁寧な対応をしてくれている。きっとロボが言ってくれたのだろう。

温かな食事や、柔らかなベッド。

夜はいつも狼姿のロボと眠った。

この城の人たちは、ロボが狼の姿になることを不思議とは思って

いないようで、廊下を狼の姿で歩いていても、何も言われることはない。

そうしてどれくらいこの城で滞在しただろうか？

オレは与えられた部屋の床に敷かれたラグの上に座り込み、目まぐるしく変化したこの一連の日々を思い返した。

第26話

とにかく、何がなんだか分からないの連続だった。

いきなり見知らぬ世界にきてしまったことも、中世の時代のようなこの国も。

オレは人が死ぬのを目の前で見たのは初めてだった。皆も、兵士も、自分が襲われたことすら。

そして、サバイバルな道のりや、豪華すぎるほどの城。

でも、何よりも驚いたのはロボである。

昔から、とにかくオレは狼が好きだった。

動物には好かれる方で、特に犬たちにはよく懐かれる方だと思う。

だから、ひとりぼっちの夜にロボと一緒に眠ってくれたことは、嬉しいことで怖いとはまったく思わなかった。

この世界には、ロボのようなすてきな狼がいるんだと、むしろ嬉しくなっただくらいだ。

でも、その狼が人間に変身するとは、これっぽっちも想像したことはない。

だって、それじゃあ一昔前のホラー映画である。

「……ってというか、狼男プラス吸血鬼って感じ？」

オレは海岸線に沈みゆく夕陽を見つめながら、思わず口にしていった。

本当に、この城に来て何日目だろうか。

砦を出て、この海の近くの城にくるまでに、オレとイヴンは言葉が通じないながらもボディーランゲージで意志疎通を計っていた。

その成果もあって、ヒアリングはかなり上達したと思う。雰囲気、相手が何を言っているのか分かるようになったのである。それに、簡単な単語会話なら交わせるようになってきた。

そうして分かったのは、ロボが誰かに毒を飲まされて、狼の姿から戻れなくなった、ということだった。

元々ロボは『偉い人』で、狼にもなれる人間だったらしい。でも、その地位を狙う悪者に毒を盛られ、人間に戻れなくなったとのことなのだ。

数日かけての身振り手振りや絵での意志疎通だったけど、だいたいはそんな内容である。

そして問題は、そんな『人間の姿に戻れなくなったロボ』が、狼から人間になったことだ。

オレの目の前で起こった変身シーンは、さっきまでの内容と矛盾する。

ここからが更に驚いたことで、なぜかオレの血を口にすると、少しの間は人間の姿に戻ることができなのだ。

ロボも、オレの血を舐めて初めてその事実を知ったらしかった。

イヴンの血でも試してみたけど、変化があったのはオレの血を舐めた時だけだった。

そしてこの城に来るまでの間にいろいろ試してみたところ、ロボの変身は必ずしもオレの血ではなくても大丈夫だということが分かった。

唾液でも可能だったのだ。

狼姿のロボがオレにキスしてきて分かったことだけど、唾液を接種してもロボは狼の姿からゴージャスな人間の姿に変わった。

オレが異世界の人間だからだろうか？

どうしてオレの体液だけがロボを狼から人間に戻すのか、理由はまったく分からない。

それでも、ロボにとってはオレという存在がすごくありがたかったらしい。

ぜひ一緒に来て欲しいと、ロボはオレに言った。

黄金色の瞳が、まっすぐにオレを見た。

それは、ずっとオレのそばにいてくれたあの優しい狼の瞳と同じもので、オレはロボの望むことは何でもきいてやろうと、漠然と思っただのだ。

そうしてイヴンとロボとでたどり着いたのが、この海辺の城なのである。

「これからどうなるんだろう……」

思わずため息をつくとき、ノックの音と同時にドアが開いた。そんなにすぐ開けたんじゃない、ノックの意味がないよなあと思いつながらドアを振り向くと、ここ数日で見慣れた赤毛の男がゆっくりと入ってくる場所だった。

オレが兵士に襲われて目覚めたときにロボたちと一緒にいた男性、カルロスである。

この城に来てからも、時々見かけていた。

でもいつも忙しそうにしていたから、あまり会話を交わしたことはなかったけど。

……どうせ、オレはあんまり話せないし。

「かるろす……」

未だに発音に自信がなかったので、小さい声になった。

何しろオレは生粋の日本人なので、外国の人の名前って覚えにくいし発音しにくい。

ホレイシヨ・ケインとスペンサー・リードは分かるんだけどなあ。そうつと伺つような視線を向けると、カルロスはにこつとほほえんだ。すごく人当たりのよい、感じのいい笑みだった。

彼はいつもすれ違つるように顔を合わせる程度だけど、オレに対してはいつも穏やかな雰囲気ですべて接してくれる。

「***、マーロ、***、ラミレス***、***」

「……………」

優しい頬笑みを浮かべて、カルロスはオレの知らない言葉でしゃべった。ゆっくり話しているみたいだけど、聞き取れたのは名前の部分だけである。

ここ最近、ロボとはかなり普通に会話を交わせるようになっていただけに、ちよつとシヨックだ。

そんなオレの様子に気がついたのだろう、カルロスは少し考える

ように黙り込んでから、再び口を開く。

「マーロ、ラミレス**が、呼んでいる」

一言一言をくぎって、ゆっくりと発音してくれると、オレにも分かった。

さつき言っていた言葉と、言い回しが違うみたいである。同じ言葉でも色んな言い回しがあるんだったら、まだまだ言葉の習得は難しそうだ。

ちなみにラミレスというのは、イヴンのことである。多分苗字だと思っけど、ロボ以外の人はイヴンのことをラミレスと呼ぶのだ。

オレは促されるままゆっくり立ち上がると、カルロスに着いて部屋を出た。

「かるろす、ロボ、かえった、くる？」

まるで女性をエスコートするようにオレを促すカルロスに問いかけると、優しい笑顔のまま頷きが返る。

「エル・シド様が戻ってきたので、ラミレス**と食堂にいます」
ゆっくりと話してくれると、オレでも何を言っているのかわかる。ちなみにエル・シドってというのはロボの本名のことだ。

こつちの人たちの名前とか言葉とかは、本当に難しい。とにかく発音が日本語とまったく違うから、単語ひとつ発音するのも、何度も何度も言い直さないといけなかった。

「だいたい、名前自体が発音し辛いし、覚えにくい。」

「ロボ、いそがすうい？」

カルロスに問いかけると、困ったような表情をされてしまった。

最近ロボはよく出かけるのだ。

この城にきてから数日は、ロボはどこにも行かずずっとオレのそばにいてくれた。

今までのように、夜はロボの黄金色の毛並みに顔をうずめるように抱きついて眠った。

そして朝、狼のロボとキスをする。

舌をからめるような、大人のキスだ。はっきりいってちょっと恥

ずかしい。いくらロボが狼の姿をしてるからって、オレは飼い犬とキスするタイプじゃないから困る。

でも、一番困るのは、ロボが人間の姿になってからだ。

最近は身体の変化に慣れてきたのか、狼から人間になる時間が短縮されたみたいで、狼のロボとキスしてるはずなのに、気付くと人間のロボとキスしてたりする。

…だから、ありえないって。

百歩譲って、狼のロボとのキスは、タロウとジロウにも顔を舐められたことがあるから、その延長上と言えなくもない。

でも、人間のロボとのキスとなると、まったく意味が違う。

何より、ロボが美形すぎるっていうのがまずダメだ。ロボはあんまりにもキラキラしてるし、整いすぎてるし、目を開けて至近距離にロボの顔を見ると、うわーっとなって、何も考えられなくなってしまう。

でも、ロボが人間の姿をしていた方が、言葉を教えてもらえて助かるのも本当だった。

意思の疎通というだけなら、実は狼のロボでも可能だ。なぜだかじつと瞳を見つめていると、お互いの気持ちが伝わってくるのである。

だからだろうか、人間の姿のロボに言葉を教えてもらうのは、イヴンに教えてもらうよりもずっと、理解が早かった。

この短期間で、何とか会話ができるくらい言葉を覚えることができたのは、ロボのおかげである。

ずっとオレにつきっきりで、そばで過ごしてくれたのだ。出会ってから、常にそうだったように。

でも、最近は朝、キスをして人間の姿になると、そのままどこかに出かけてしまう。そして遅い時には夜まで戻ってこなかったりする。

イヴンもロボと同じく忙しくしているし、居候のオレが文句をいうのも筋違いだって分かってはいるのだけれど、それでも寂しい。

何より、することがないっていうのが辛かった。

ここにはパソコンも、ゲームも、テレビも漫画もないのだ。

だからオレは大体、用意してくれた部屋で子供向けの本を読んだりして過ごしていた。メイドさんみたいな人たちはいたけど、あんまり親しみやすい感じはなくて、あくまで仕事という感じでオレの世話をしていたから、取り残されたようで退屈な時間だった。

これなら、結構過酷だったけど、ロボとイヴンとでこの城を目指していた頃の方がよかった。

城での生活のほうが無暗楽だけど、みんな忙しそうにしているから、一人でじっとしているのが苦痛なのだ。

だから、こうしてロボが早く帰ってきて一緒に食事ができる日は、すごく嬉しい。

オレとカルロスが食堂につくと、ちょうど外出から戻ってきたらしいロボとイヴンがテーブルの横に立ち、難しい顔で話しこんでいた。

第27話

「ロボ！ おかえり！」

オレが声をかけると、振り向いたロボは優しい表情でにこりと笑う。

「マシロ」

小走りに駆け寄って、ロボに抱きついた。

長身のロボに抱きつくと、小柄なオレはちょうどお腹の少し上くらいにしがみ付いてるお猿の子供みたいになってしまう。

「マシロ、ただいま」

ロボはしがみつくオレの頭をそつと撫でて、優しい笑みを浮かべた。

思わず赤面してしまうような、すごくキラキラした微笑みだ。

「いぶんも、おかえりなさい」

ロボの腹に抱きついたままイヴンにも声をかける。

「ただいま、マーロ」

イヴンもにっこりと笑ってくれた。

今日は二人で朝早くから出掛けてしまって、正直ずっと寂しかったから、すごくホツとする。

思い返してみれば、今までの生活で、オレはあまり一人でいる、という状況になったことがなかった。

学校ではいつも友達と一緒にだったし、家に帰っても家族の誰かしらがあった。自分の部屋があっても、殆どをリビングで過ごして、それこそ寝る時くらいしか一人にはならなかったと思う。

だからだろうか、知らない人ばかりの中で、一日一人で過ごさなければいけないことは、正直かなり苦痛だ。

「マシロ、ひとりにして済まない」

ロボはまるでそんなオレの心情がわかっているかのように言っ
しがみつくとオレを抱き返し、小さな子供を宥めるように軽くゆす

た。

オレは首を横に振る。

もともとオレの方が面倒をみてもらっているのだ。ロボが謝る必要なんてない。

それに、オレだって馬鹿じゃない。この城に来て、城の兵士や働く人たちの反応をみれば、ロボやイヴン、カルロスたちがどれだけ「偉い」のか、すぐに分かった。

誰もが彼等に傳くのだから、気付いて当然だ。

「食事にしようか」

ロボに促されてテーブルに着いた。

席はロボの隣だ。

食堂は大きなテーブルが中央に置かれている。細長いテーブルは二十人は座れるんじゃないかという長さだ。床には豪華な模様の入ったラグが敷かれ、天井には口ウソクを燈すシャンデリア。

窓にかかるカーテンも厚みがありたつぷりとしている。

オレの感覚でいくと食堂と言うよりはホテルのパーティー会場と
いうか、超豪華な洋館のダイニングルームというか……。そう、映画
とかで見るフランスの時代ものの世界のような。マリーアントワネ
ットとかルイ何世とか。

でも、ロボがいうには、この食堂は少人数用の一番小さいもので、
この城にはもっと大きい部屋もあるそうだ。

何だかもう、それだけで世界が違うなあと、感心するやら呆れる
やらである。

テーブルの上には食事の用意がほとんど出そろっていて、給仕が
最後に温かいスープを置いて退出すると、室内はロボとイヴン、カ
ルロス、そしてオレだけになった。

食事のスタイルにも色々あるみたいだけど、この国のマナーがよ
くわからないオレのためだろうか、大抵テーブルの上にすべての料
理を用意して出してあって、フランス料理のコースみたいに、給仕
が途中部屋に入ってくることはない。

オレとロボはいつものように、大きなテーブルのはしっこに座り、並んで食事を始めた。

最初にこの部屋で食事をした時はイヴンもいなくて、ロボとふたりきりだった。広すぎてどこに座ればいいのか分からず戸惑っていると、ロボが自分のすぐ横に椅子を置いてくれたのだ。

それからはずっとロボの横に並んで座るようになった。

イヴンとカルロスは、二人ともロボよりかなり離れた位置に座っている。多分この距離が本当は正しい位置なんだろう。

でも、家族みんなで食卓を囲むのが普通だったオレにしてみれば、この距離はありえない遠さだ。

「マシロ、食べないのか？」

ロボが声をかけてくるのに、オレは我に返って料理に手を伸ばさず。イヴンとカルロスは、ロボとの距離を遠いとは思っていないみたいで、普通に食事を始めている。

オレも彼等にならって、取り皿に料理を乗せた。

この城に来てからの食事はすごくおいしい。

海の近くだからだろうか、魚介類が中心で、トマトによく似た味のソースは絶品だ。

この国の料理はイタリアンっぽくて、日本人のオレの口にもよくあっている。

「おいしー！」

魚介と野菜のトマトソース煮込みを口にして、思わず言葉が出た。

「マーロはトマトが好きだな」

思わず笑顔のオレに、ロボも笑いながら言う。

「だって、すごくおいしー！」

オレは目の前のじゃがいもに見える野菜をフォークで突き刺して、ほら、とロボの前に差し出した。ロボは笑いながら、がぶりとかぶりつく。

「おいしよね？」

「ああ」

にこりと笑うロボは、何だか可愛い。

とりあえず目の前の料理をやつつけることに集中して、お腹が落ち着いた頃、カルロスが話し始めた。

「エル・シド**、それでどう****?*」

またカルロスの言葉が分からない。

思うに、多分普段の言葉遣いと、また違う言葉遣いがあるんだと思う。

丁寧な言葉とかそういう感じのが。カルロスがロボに話しかける言葉が分からないのは、きっとそのせいだ。

カルロスの言葉に、ロボはオレを振り向いた。

「……？」

なぜかジツと見つめられて首を傾げる。

「なに？ ……たべる？」

オレは手にしていた食後のデザートの実物をロボに差し出した。

それにロボは笑い、差し出された実物をパクリと食べる。

でも、当然ながらロボの興味は果物ではなかったようで、咀嚼後オレの名を呼んだ。

「マシロ」

「なに？」

残りの実物を口にしながら問い掛けると、ロボはとても真剣な表情をしていた。

思わずオレも居住まいを直す。

「城に戻ることにしたのだ。一緒にきてくれるか？ 私の**」

*として」

「……??」

ロボの言葉に首を傾げる。

「しるに……かえる？」

今その城にいるのに帰るってというのはどういう意味だろう？

それともオレのヒアリングが間違ってるんだらうか？

そんなオレの疑問に気付いたのだらう、ロボは言葉を続けた。

「ここは私の城ではないのだ。皆から一番近い城だったので、とりあえず立ち寄ったが、もう戻らねばならない」

「ロボのしろ？」

何だかとてもないことを聞いた。

ロボは自分のお城を持っているのだ。

そんな人、オレの周囲にはいない。ロボって、いったいどれだけすごいお金持ちなんだろう。

イヴンもカルロスもロボの部下っぽいし、この城にきてからも、ロボは城の主然としていた。

だからオレは、この城がロボの家だと思っていただけで、どうやら違ったらしい。

ロボはじつとオレを見つめると、ゆっくりと大きな手のひらをオレの頬にあてて、視線の高さを合わせるように身をかがめた。

「ロボ……？」

キラキラの美形であるロボに見つめられると、何だか照れくさい。狼の姿のロボは、すっごく可愛くてかっこよくて、ぎゅゅと抱きついてその毛並みに頬ずりしたいって思うのに、人間のロボは何だかちょっとくつつくと恥ずかしい気持ち湧いてきて困ってしまう。「マシロ、私と一緒に来てほしい。私の***として」

ロボの声は低くて甘くて、何だか聞いているだけでドキドキする。……なんか、やっぱり照れる。

オレは綺麗な黄金色の瞳を見ているのが恥ずかしくなって、思わず視線をそらしてうつむいてしまった。

「……いつちよ、いくけど」

ぼそぼそと小さな声で返す。

どうせ、オレには行くあてなんてないのだ。家に帰りたいたいと思っても、どうすれば元の世界に戻るのかも分からない。

この見知らぬ国で、どこにも行くあてもなくて、一人ぼっちで残されれば、まともに生きて行くこともできないだろう。ロボと一緒に行く以外に、オレに選択肢はない。

第28話

でも、大好きなロボと一緒にいられるのは、純粹に嬉しいことだ。人間のロボは照れてしまう時もあるけど、狼のロボは優しく、安心してきて、すっごく穏やかな気持ちになる。

一緒にいるだけで、何にも怖いことはないんだと思えるのだ。

「ロボ、オレいっちょ、いい？」

そろりと上目づかいでロボの表情をしてみる。

どう考えても、オレはただのお荷物だ。

詳しく聞いたわけじゃないけど、ロボもイヴンも責任のある立場にいて、毎日忙しく仕事をしている。

ロボの置かれた立場が複雑だっというのは、そんな雰囲気の間々から感じられた。

そもそも、毒を飲まれたという時点で、普通の出来事ではないのだ。

日本だったら殺人未遂である。

この間ロボに少し、そのことを聞いてみた。

教えてもらった内容は、オレからすれば、まるで現実ではないように聞こえてしまう。それこそ、小説や映画の中の出来事のようにだった。

始まりは、ロボのお父さんが体調を崩し、引退を決意したことだと、ロボは言った。

その後継者として候補に挙がったのが、ロボと、お父さんの弟、つまりロボから見れば叔父さんである。

でも、最終的にお父さんの後継者はロボだと決まったらしいのだ。そして諦めきれなかった叔父さんは、ロボに毒を盛った。

…まるで火サス。

遺産相続殺人事件、狼は見た。お城に漂う不気味な白い影。毒を飲んだ城主の運命は…。

頭には、テレビドラマのテーマソングがタイトルバック入りで浮かんだ。

狼から人間の姿に戻れなくなったロボは、解毒剤を求めて旅に出たらしい。

イヴンもカルロスもそんなロボの味方で、みんなで何とか現状を打破しようがんばっていたとのことだ。

そして、現れたのがオレである。

オレが異世界から来た人間だからだろうか、オレの体液はロボを一時的に人間に戻す力がある。

ロボが朝、オレの体液を取り入れると、だいたい夕方くらいまでは人の姿を保てる。でも、取り入れた体液の量によっても、その日の体調によっても違うようで、昼間に狼の姿に戻ってしまったこともあった。

するとロボは出先からオレのところに戻ってきて、俺にキスしてまた出かける。

オレがいてくれてよかったって、ロボは優しく言ってくれるけど、でも、逆に言えばオレが役に立つのなんて、それだけである。

言葉も満足にしゃべれない、素性すら分からない、何の力もない子供。

そんなオレと一緒にいいのだろうか？

ロボは不安いっぱいに見上げるオレに、黄金色の瞳をすがめ、凄く優しく微笑んだ。

「マシロがいいのだ。どうか、私の****として、共に来てくれ」どこか懇願するような声だった。

まっすぐに、黄金色の瞳がオレを見て、低く耳に甘い声がえう。いったい誰が断れるというのだ。

オレも、もちろん例外ではない。

乞われるまま、オレはゆっくり頷いた。

「ロボ、『ずるい』」

こちらの言葉でなんて言うのかわからなくて、思わず日本語でつ

ぶやいた。

こんなにキラキラしくて、うつとりしてしまうような瞳と声で囁かれたら、頷く以外の選択肢なんてあるはずないのだ。

「『ずるい』?」

ロボがオレの言った日本語を繰り返す。

でも、こちらの言葉でなんて言えばいいのか分からなかったし、説明すると、墓穴を掘るような気がしてきた。

だって…。

ロボのその顔で、その瞳で、その声で乞われると、どんなことでも断れないなんて、本人に言っただうする。

オレはそれ以上言葉を続けるのをやめた。

どうしたって、オレはロボと一緒に行くんだし、自分に不利になるようなことを、事細かに説明する必要もないだろう。

「オレ、ロボ、いつちよいく」

まっすぐロボの瞳を見つめて言うと、ロボは嬉しそうに笑った。多分、尻尾があったら勢いよくぶんぶんと振られているな、と想像できるような、何だか少年のような笑みだった。

「あれ、なに?」

オレは目につく色んなものを指さして聞いた。

城下町というのだろうか、こちらに来て初めて目にする賑わいである。

海辺の城からロボの城までは、それほど遠くはなかったようで、馬で二日の距離だった。

今までのサバイバルな移動とは違って、街道を通ったし、普通に宿屋にも泊った。

そしてカピタルと呼ばれる町に近づくと、街道沿いにどんどん建物やお店が増えてきて、お城が目の前になるころには、人であふれ

かえる活気のある城下町に入っていた。

オレは、ロボの乗る馬の前に一緒に乗せてもらって、ゆっくりと城に向かっている。

ロボもオレも、頭からすっぽりと覆われるマントみたいなものがぶつっていた。キラキラと輝くロボの黄金色の髪は、どうしても目をひいてしまう。それと同様、褐色の肌を持たないオレの姿も人目をひくらしい。

その点、イヴンは金髪でも灰色かかった短髪だし、肌の色も他の人たちと変わらない。

城にいた時のように立派な服装をやめ、旅人の格好をすれば、それほど目立つこともなかった。

カルロスはオレ達よりも一足先に発っていて、結局三人での移動である。

オレはもつとゆっくり町や市場を見てみたかったんだけど、それに気付いたのかイヴンは小さく笑って、また今度と言った。そしてそのまま、まっすぐに城に向かう。

先頭を歩くイヴンは、城壁まで着くと正面の大きな門のある入り口ではなく、城壁沿いに進み、裏口に回った。

「カルロス！」

イヴンが声をかけると、勝手口みたいな小さな門がゆっくりと開く。

「時間通りですね」

門の中ではカルロスが待っていた。

「お帰りなさいませ、エル・シド様」

カルロスはロボに向かつて深々と頭を下げた。続いてイヴンにも「ラミレス**もご無事でなによりです」

そしてオレたちはカルロスに招き入れられて、城の中に足を踏み入れた。

馬を引きながらイヴンが入り、城の大きさに立ち止まってしまったオレを促すように、ロボ軽くオレの背を押す。

「お城、すごくおきい、ね」

オレは入り口を入った先に広がった景色に大きく口を開けた。外から見ても大きな城だっということは分かっていたけど、こうして間近で見ると、石造りの、フランスやイギリスの王侯貴族の住むそれに類似してる。

「マシロ、こつちだ」

ぼかんと立ち尽くすオレの背中を再びロボが押した。

オレはきよろきよろと周囲を見回しながらロボに押されるまま歩く。

「こちらです」

カルロスがこれまた、勝手口のような小さな木戸からオレたちを建物の中に入れる。

なんだか、ずつとこつそりしてるけど、大丈夫なのかな？

オレはカルロスに人気のない廊下を案内されながら、ロボたちの立ち位置ってどうなんだろうと首をひねる。

ロボは王様で、王位を狙っているおじさんに毒を飲まされて狼の姿から人間に戻れなくなった。それで、その毒の解毒剤を探してお城を後にした。

ロボが説明してくれた内容からすると、そのおじさんっていうのはこのお城にいるんだろうか？

だから、こんなふうにごそそと人気のない場所を選んで移動してるんだろうか。

聞いていいのかどうか分からなかったので、とりあえずオレはロボたちについて歩く。

何度か廊下を曲がった先の、本当に人のいない一角にある部屋の扉を、カルロスが開いた。

「こちらです」

イヴンが入り、ロボに促されたオレが続いて、その後にロボも部屋に入った。

あんなに奥まった場所に向かって廊下を歩いていたのに、室内は

窓から入る光ですごく明るい。

薄暗い廊下を歩いていたから、室内の明るさに目がチカチカした。何度か瞳をしばたくと、やっと室内の様子が見えてくる。中央に大きな丸いテーブルが置かれていて、等間隔に椅子がある。カーテンはレースのものと、重厚な雰囲気のある刺繍が施されたものだ。

オレの後ろで、カルロスがドアを閉める音に、驚いてびくりと肩が揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6907u/>

CATCH THE RAINBOW

2011年8月14日11時10分発行